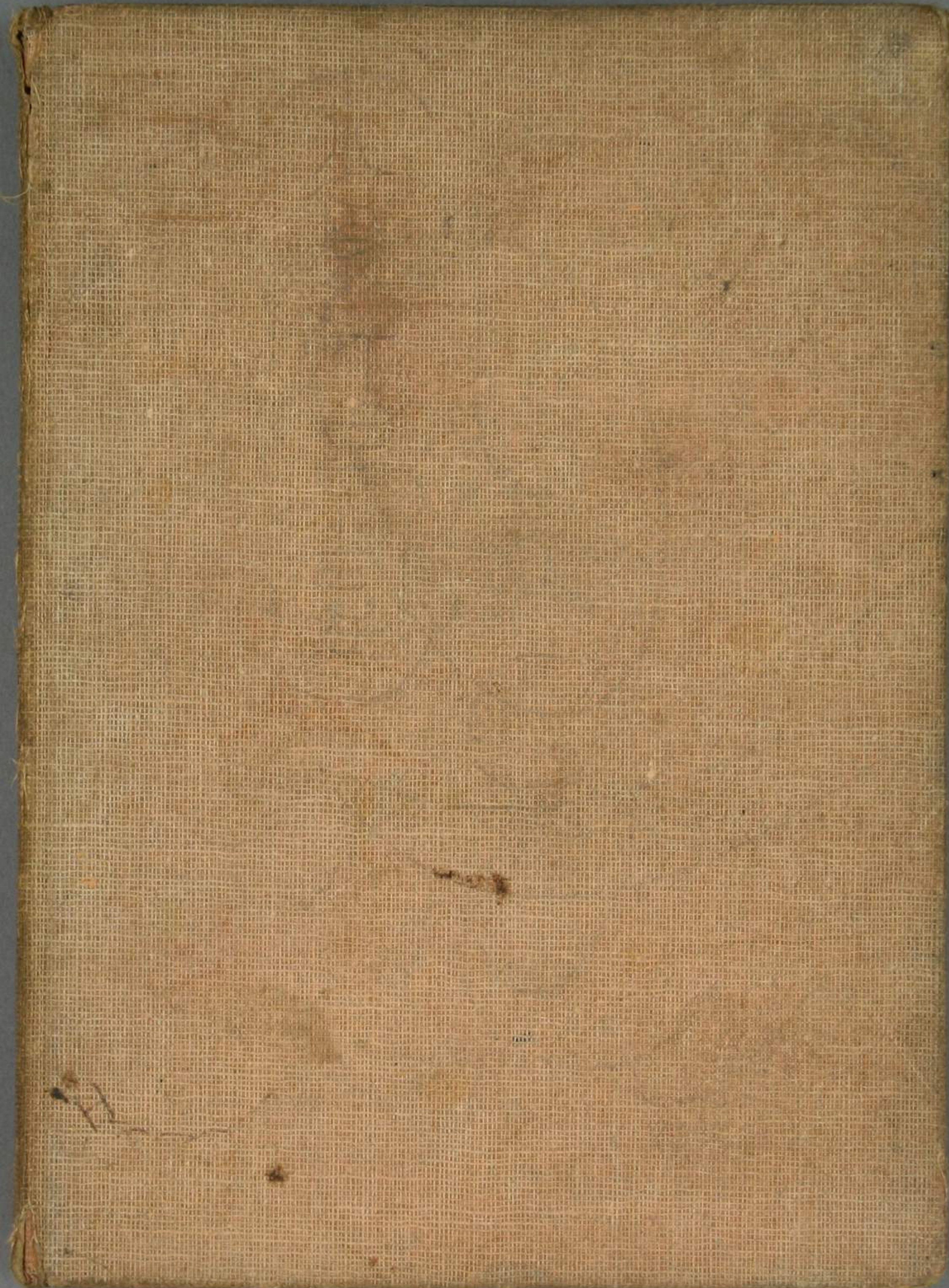


詩及小品集



詩
及
小
品
集

國
木
田
獨
步
作

□ 新 潮 社 出 版 □

目次

詩歌

嬉しき祈	二
再會	三
近頃逝きし友を思ひて	五
亡き友	一〇
告天子	一一
大連灣	一二
相馬良子に送りて近頃音信の無き恨む	一六
——に送らんさて作り遂に送らざる歌	一七
別れ	二二
涙川	二五

冬の山家	二五
亡友を懐ふ	二六
董	二九
都少女	三〇
高峰の雲よ	三〇
限なき空	三一
破	三二
友情消ゆ	三三
驚	三四
夏の夜	三五
濱づたひ	三六
枯野の友	三六
友なき里	三七
春來り冬ゆく	三八

門邊の子供	三九
君ゆえに	四一
戀のきはみ	四二
森に入る	四三
聞くや戀人	四五
今こそは	四六
「こそこの今」	四七
山林に自由存す	四八
沖の小島	五〇
山中	五〇
秋の月影	五一
獨座	五二
故郷の翁に與ふ	五二
戀の清水	五四

風の音	五五
山の聲	五六
ゆめうつゝ	五七
すみれの花よ	六二
わがこゝろ	六五
水際のわかれ	六六
友人某に與ふ	六六
亡友を懐ひて	六九
夏來りぬ	七〇
そのうた	七一
若鳥	七二
我身	七三
晃山の春	七四
行雲流水	七五

人のすみか	七六
雲影	七七
たき火	七七
鎌倉妙本寺懷古	八九
葦	九一
蝶	九二
秋風戀	九二
がりがれ	九三
夢	九三

小品

沙漠の雨	九五
彼	九七
落日に對す	一〇四

鎌倉の裏山	108
新らしき年来れ	111
晝	116
驟雨	114
無窮の生命	110
死	116
戀の日記	117
孤立の悲惨	110
わが過去	113
趣味について	114
青桐	117
憐れなる兒	118
吾が土曜日の夜	115
我が過去	111

潔の半生	112
天地の祕密	110
青年少壯の時代	111
信仰と肉情	114
唯皮相のみ	112
信仰	112

詩及小品集

國木田獨步

嬉しき祈

朝なく夕なく
我にうれしき祈りあり
祈りに曰く、あゝわが神！
彼女の上を守れかし！
われを見捨てし彼女の上に
肉にも靈にも安きを賜へ
あゝ此祈！
いかにうれしき祈りぞや
人なき室にたゞ一人

涙とともに祈るなり！

再會

この世にまた
君と遇ふことあらんとも
思はざりしに
忘れねばこそ面影の
早くも君を見つけぬる哉
浮世の巷に遇ひみれば
君はをさな子背に負ひて
よき母親となられたり。

君と別れてはや四とせ
四とせが間
世のうきふしに遇ふ毎に
別れし君を思ひ出でける。
我は昔にかはらねど
君は母御となりにけり。
そのをさな子を背に負ひて
玉川の清きほとり
そのふる里に歸り行け。
われは都に
別れし君を思ひつゝ
世のうきふしに

淨世のちまたにさすらはん
この世にまた
君と遇ふことあらんかも

近頃逝きし友を思ひて

君は已に此世を去りて
靜なる處に行き給ひぬ
吾は今猶前途の夢に迷ふ。
前途！前途！何處にかある
靈なる君の聲をあけて

吾を夢よりさませかし。

君と吾とは友なりき

吾は君をいつくしみき

然り、愛したりと思ひ居たり。

君逝きて、吾一度泣きぬ

今は如何に、あゝ今は如何に

君逝きてまだ一月を経ず。

わが心すでに君を忘れんとす

吾また君を思はざらんとす。

天も地も不思議の命も。

君と別れし刹那こそ

いと怪しくも思ひしが

今ははや何の不思議も消えにけり。

靈なる君よ

迷冥にあらん吾が友よ

夜更けて願くは吾が界を訪へ。

吾君に會はんと

昨夜芝公園にと行きぬ

集品小及詩

人行き絶えし森のなか
古き建物いや凄き
ものゝおやめも見えぬ處
靜に苔むす石に腰かけ
暗にむかひて君を呼びぬ
友よ、されど聲は無かりけり
身の毛のよだつのみなりき。

君がゆきしそのあとは
雨のみ降り、日も暗く
我心いとむすぼれしが
そはたゞ濁れる血のせきしのみ。

集品小及詩

世にあると世に亡きと
何の隔てのあることぞ
君よ、迷冥にあらん君よ
希くはとこしへの情をつゝくれ
吾をしていつまでも君を
忘れしむる勿れ。

如何に前途の夢にあくがるゝ時も
如何に人のてだてに涌き立つ時も
如何に世の様を嘆く時も
如何に戀の幻になやむ時も

君よたゞに吾にのりて
此世の不思議を説けよかし
命の不思議を説けよかし
天地の不思議を説けよかし
以て吾を眞面目ならしめ。

いざ去らば、今夜は
君と語らん、暗き森に
君と語らん。

亡き友

墓を隔てし君なれば
我世の様や見えざらん
天にまします君なれば
此世の今を眺むらん
我れに理想の光無く
國に正義の響絶え
雨濛々の夕まぐれ
ひとへに君を思ふ哉。

告天子

身をば心に任せつゝ

心を天にまかせつゝ
花野のかげの峙をば
あけの眞珠の星に立つ。

大連灣

茫々夢の如し憶ふ彼日
悠悠日月轉ず憶ふ彼夜
大連灣今如何
旅順口頭猛鷲旗樹つ。

艦隊一條長く

指すや大連灣
秋光波に溶け
高し黄海の天。
陸兵背を衝く日
戦艦前を扼するの約
海陸の計空しく
敵に勇卒無し。

見よや和尚島
翩翩たり日章旗
笑聲起る、敵を笑ふなり

歡聲涌く、我を祝ふなり。

茫々夢の如し、憶ふ彼日

悠々日月轉ず、憶ふ彼夜

大連灣今如何

和尚山頭猛鷲旗樹つ。

大同の江の夕まぐれ

花園口のあけの星

夕は燈火を滅し

曉に敵地を窺ふ。

咄嗟上陸す三萬の軍

劍光日に映す遼東の野

風無し、波無し、敵影無し。

清國英をあつむ旅順口

想ふ黄海の殘艦潜むと

黄金山白煙咄として起る

艦側白浪聳つ

空に劈くの霹靂

艦上快哉を叫ぶ。

艦を旋らす大連灣
報あり、旅順落つと。

相馬良子に送りて近頃音信
の無きを恨む

董の花はいかにせし
君がおくりて慰めし
かの花今はいかにせし。

嬉しき夢を去年こぞの春
見果てし朝の悲を

君が誠の涙もて
濺ぎし花を力にて
夕べ僅にしのびにき。

かの花今は如何にせし
とても果敢なき我れなれば
我れを見捨て、枯れにしか。

——に送らんごとて作り
遂に送らざる歌

戀こそ夢なれ行末は

涙の川に身をうかべ
浮世の波にたゞよはん
今の別れの悲しさを
歌ひ盡さん調なし
たゞすこやかに在せ君
たゞすこやかに在せ君
はてなき海の千里の波に
谷また谷の岩間の淵に
萬代よろづよかけて月澄みつ
千代の昔の人ゆきぬ。

峰に白雪峰より峰に
底に眞珠の珠より球に
萬代かけて月澄みつ
千代の昔の人ゆきぬ。
月の光に誘はれて
奥津城訪はん林の奥の
月の光に誘はれて
賤との男訪はん深澤みこさばの岸の
我が身昔の吾ならず。
月し昔の色澄めり。
をさなき時を思ふかな

去年こぞの今夜をおもふかな。

あしたの雲の華やかに

夕の時雨しめやかに

君と語りし年も暮れて

今夕ばかりとなりにつけり。

忘れそ、君よ彼夜をば

其夜は殊に月澄みて

君が面輪は輝きて

我血靜に脈うちぬ。

別
れ

今日をかぎりの別れとは

夢知らざりき夢にのみ

君に逢瀬を樂みし

我世も夢となりにつけり。

目も杳かなる野末見よ

遠山霞む彼方には

人住む里も多からん

其里戀し、君が行く。

人の世古き昔より
逢ふては別れ別れては
また逢ふこともあらなくに
別れし人も多からめ。

十歳とせの後の冬の夜に
君が門の戸叩かん折
せめては内に入れたまへ
越し方の日を語るべし。

君は彼日を語りいで

吾は彼夜を忍ぶべし
梢をわたる風の音は
かたみの涙さそひつゝ。

百歳もも後の秋の夜の
月は木の間を迷ふとも
君がおくつき照すべし
蟲の音しけき山里に。

わが墓いつか苔むして
文字さだかにも讀めぬ日は
誰か知るべき君と吾

住みてこの世に逢ひしことを。

逢ふては別れ、別れては

東に西に埋れゆく

千代の昔の神世より

はかなき人も多からめ。

逢ふは東の間別れこそ

はてなき恨み此世こそ

戀の屍と冬枯の

あらしに曝す暮ならむ。

涙川

小川谷川末終に

大海原おほうなばらに注けども

人の情の涙川

湛へて汲まむ時ぞなき。

冬の山家

眞柴まが焚く山家の民

芋いもふかす夕の團居

今宵またかの唄聞かん
いかなれば彼人遅き
待つ乙女待たる、人は
水清き村の若者。

「君と別れて松原ゆけば

松の露やら涙やら」

「咲いた櫻になぜ駒繫ぐ
駒がいさめば花が散る」

ありふれし唄のかすく
盡きぬ間に夜は更けにけり。

月出でぬ東の小窓

松風を影にうつして

「歸りなん今夜は宿に」

「明日の夜も來りて唄へ」

家の者床に入りしも

少女のみ眠りがてにす。

山路ゆき月に浮かれて

若者の歌ふ聲冴ゆ。

かつくゝに遠ざかりゆく

彼人の聲絶えくゝに。

ほゝゑみて少女眠りぬ

まどかなり今夜の夢も。

亡友を懐ふ

君をあはれと泣きたりし
我れをあはれと君泣かん
さばかり我れは面瘦せて
此世の夢をはかなみつ
たゞ速に永闇の
夜よりきたり誘ひて
友がおくつきそのわきに
われを伴へ、速に。

堇

春の霞に誘はれて
おぼつかなくも咲きいでし
堇の花よ心あらば
たゞよそながら告げよかし
汝れがやさしき色めで、
摘みてかざして歸りにし
少女や今日も来りなば
「君をば戀ふる人あり」と。

都少女

都少女よ春風に
花の振袖きそふとも
甲斐ぞなからむ塵深き
街の色の朝夕に
なれが心を染めぬかは。

高峰の雲よ

高峰の雲よ心あらば

乗せてもてゆき此我れを
大海原のたゞ中の
人無き島に送れかし
斯くて此身は浮世より
消え失すとても此われは
天地あつちひろき間にて
人とし生きむ。しばしだに。

限なき空

限りなき空あふぎつゝ
とこしへの望かたらひし

君がまなざし忘れねば
物の思に堪へかねて
獨りながむる久方の
天のはるく戀しけれ
間近に君はいませども。

破壊

破壊は悲し
尤も悲し
愛の破壊は
これを感じる

われ人里に深からば
人の涙は
更に清きを。

友情消ゆ

貧しきを泣かむや
名無きを泣かむや
少年の春の経過を泣かず
残燈に對して黙座す
冷かなる涙一滴
蒼顔をつたはるは

世にも深かりし友情の

餘りはかなく

消えたれば

驚異

ゆめと見るくはかなくも

なほ驚かぬ此ころ

吹けや北風此ゆめを

うてやいかづち此ころ

をのき立ちてあめつちの

くすしき様をそのままに

驚きさめて見ん時よ

其時あれともがくなり。

夏の夜

夏の夜はれて星みつ空

さびしき野邊をひとりたどる

仰げば高いよ、高し

嗚呼わが心天をゆびざす

濱づたひ

夕日まばゆき砂こえて
われ心なく濱づたひ
沖の白帆や眞帆片帆
浮世の波を知らずがほ

枯野の友

枯野のなかの此ひとつ家
家のうしろのひとつ松

わが友とては此松のみ
枯野のなかの一もと松
おとづるものは風ばかり
友とし言へば此われのみ

友なき里

今日一日も暮れにけり
友なき里にさびしくも
入相告ぐる鐘の音に
今日一日も暮れにけり
明日もさびしく暮すらん

友なき里にさびしくも

春來り冬ゆく

のぼる朝日を迎へては

春よ春よと叫ぶをば

梢の鳥も同じこゝろに聞とりて

ねをふりたて、囀りぬ

囀る聲をきゝてはわれも

春よ春よとまたよびぬ

沈む夕日を見送りて

冬よ冬よと叫ぶ時

遠寺の鐘のおとも哀れに鳴りひびき

冬の心を弔ひぬ

きえゆく鐘をきゝてはわれも

冬よ冬よとまたよびぬ。

門邊の子供

街の塵にまみれつゝ

浮世の風に吹かれつゝ

門邊に遊ぶ子供等の

よろこぶ様をみる毎に

あはれ子供よなれも亦

住みて悲しきあさましき

此世に生れおひたちて

涙の谷へといそぐなる。

けに哀れぞと思ひやり

空ゆく雲をながめては

雲のゆくへのきはみなき

深き思に沈むなり

君ゆるゑに

烏羽玉のやみの命を泣きつるに

君ゆるゑに春の月夜となりにけり

うつらくと戀ゆるゑに

樂しき夢をむすびつゝ。

樂しき夢のさめぬ間に

わるき血しほのかれぬ間に

戀てふ翼をれぬ間に

とことはの國に入らましあはれ君。

戀のきはみ

戀しき君よみそなはせ

　　苔むす古き此暮を

われらが若き戀の身も

　　樂しき今の此戀も

はかなく消ゆる其時の

　　時の羽風ぞ身にはしむ

あはれ戀しき此こゝろ

　　戀のきはみの涙かな。

戀しき君よ此涙

　　星にもにたる君が目に

露より清く浮ぶ時

　　限りなき空仰ぎつゝ

われは見るなりとことほに

　　君ともろとも住む國を

あはれうれしき此こゝろ

　　戀のきはみの望なれ。

森に入る

遠山雪をわれのぞみ

若き血しほぞわきにける
自由にこがれわれはしも

深き森にぞ入りにける。

あはれ乙女のこまねきて

戀しき君よと呼びければ

わかき心のうきたちて

何時しか森をわれ出でぬ。

森をば慕ふわれなれば

都のちまたに生ひたちし

乙女のこゝろあきたらで

戀を黄金に見かへしぬ。

あはれはかなきわが戀よ

若きこゝろもくだかれて

わかき血しほも氷りはて

をぐらき森にわけ入りぬ。

聞くや戀人

聞くや戀人烏羽玉の

やみの枯野に聲すなり

狂へる人の叫ぶ聲

あらしにまじりて絶えづくに
君が名よびて行く聲を。

今こそは

行先は何處ともあれ
行末は如何にともあれ
すぎこしかたの夢もさめにけり
今こそは此身ひとつの旅路なれ。

漫々たる大海今より爾にまかす
八重の潮路の朝風よ

淺かりし契のなごりふき拂へ
今こそは此身ひとつの舟路なれ。

いざ去らば富士の高峰もいざ去らば
八百八島今をかぎりの涙かな
たらちねのわが故郷もいざ去らば
今こそは此身ひとつの舟路なれ。

「こそこの今」

そぼ降る雨の音長く
野末をわたる風遠し

思ひ起すは去年の今
「去年の今」とてよもすがら。

山林に自由存す

山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林を見ずてし。

あくがれて虚榮の途にのぼりしより

十年の月日塵のうちに過ぎぬ

ふりさけ見れば自由の里は

すでに雲山千里の外にある心地す。

譬を決して天外をのぞめば

をちかたの高峰の雪の朝日影

嗚呼山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

なつかしきわが故郷は何處ぞや

彼處にわれは山林の兒なりき

顧みれば千里江山

自由の郷は雲底に没せんとす。

沖の小島

沖の小島に雲雀があがる

雲雀すむなら畑がある

畑があるなら人がすむ

人がすむなら戀がある

山中

山路たどれば煙が見ゆる

谷の小川に蘂流る

何處の誰がおすみやるか

峰の松風さびしかる。

秋の月影

秋の月かけひとりでふめば

おのが影のみさきにしたつ

ふりさけ見れば目に涙

露を拂へど風が吹く。

獨座

夜更けて燈前獨り座す
哀思悠悠堪ゆべからず
眼底涙あり落つるにまかす
天外雲ありわれを招く。

故郷の翁に與ふ

翁よ今もすこやかに
丘の麓にくらすらん

丘の小松の夕日影
今も昔のまゝにして
戀しき翁今もなほ
松葉かきつゝうたふらん
うたふ其聲今もなほ
さびしき谷にひゞきつゝ
谷の小川の水せきて
夏の日ながく暮せしも
今は昔となりにけり
われは昔のわれならで。
あはれ翁よ此われを

今も昔のわらべぞと
昔のまゝにおぼすらん
翁は昔のまゝにして。

戀の清水

戀の清水を汲む者は
まごゝろ強くもてよかし
樂しき夢のさめぬ間に
きよき現にうつりなん。

天津眞清水くみつゝも

まごゝろ淺き少女見よ
黒き血吐きて斃れたり
いつしか夢もさめはてゝ。

風の音

ふと小夜更けてめさむれば
のきばをさわぐ風のおと
春や來りし冬ゆきし。
枯野の小屋の夢あはく
遠ざかりゆく風のおと
冬やのがれし春やきし。

山の聲

峰より峰に風わたり

遠ざかり行く其聲を

聞きすます間に水のおと

溪より溪にひびくなり

風聲遠く水近し。

水のおとにもあらぬ聲

風の聲にもあらざるは

月にうかれて山がつの

妹がりゆきつ歸るさの

山路こえつゝうたふなり。

あはれ其聲たえぐに

風にまじりつ水おとに

絶えつきこえつ遠ざかり

末は嵐となりにけり

風聲遠く月さむし。

ゆめうつゝ

昨夜の夢のあやしさを

語りつくさんすべもがな
 ゆくへもしらすさすらふは
 我身か、あらず、影なるか
 暗きをたどるをのこあり
 仰けば空の星消えて
 常世の闇の光なし
 とばかりありて星一つ
 とばかりありて二つ三つ
 かゝやき出でぬくれなるに
 見る間たちまちむらさきに
 我身か、あらず、影なるか
 をの、き立てるをのこあり。

夢をみるく夢ならで
 我身くすしくなりにけり
 心たちまちをの、きて
 あはれ我身と叫びたり
 とばかりありて星飛びぬ
 とばかりありてたまゆらぎ
 我身くすしくなりにけり。

夢さめぬ朝日のぼりて
 かぎりなし天のはるく
 あかつきの光は清し

風吹けば青葉かゝやき
鳥啼きて今日も變らず
いかなればくすしかりけん
この我身昨夜の夢に。

夕闇遠し、獨りして

小川の岸をたどりつゝ

仰けば高し、色深し

瑠璃の天空雲たえぬ

見はてのかぎり山見えす

吹き送る風は袂をひるがへし

うたふ聲森をへだて、聞ゆなり。

牛ひける童は見えす鐘の聲
遠近の寺にひゞきつ獨りゆき
ものを思へば、はてもなし。

我身あやしと見し夢は

夢よりさめし夢なるか

夢にあやしと見し星は

色に光に變りなし

現の今ぞ夢なるか。

夢みなん、いざ今宵また

星飛びて月も碎けよ
底さけて眠れる火山
降りそ、け焔の雨
をの、きさめんかくて吾
夢のうちにもうつし世の
にぶき眠の迷より。

すみれの花よ

すみれの花よ。今日までは
なれをめでにしわがこゝろ
世の常なりし淺かりし

さばかりわれは塵ふかき
浮世の卷さすらひし。
夢よりさめしこゝちして
さめし夢をばはかなみつ
まなざしにぶく此丘を
ゆきつもどりつせしまゝに
はからずなれを見いだしぬ
朝露かをる日影にて。

天つひかりよ。白露よ
すみれの花よ。今日よりは

なれが友なれ、涙こそ
あふれて落つれ、わがこゝろ
たゞひと時に静まりぬ。

友としなれをつくぐと
ながめいりにし其時は
大空たかく仰がれて
心はひく、へりくだり
人の世ならぬあめつちの
廣きを家とおぼえたり。

たゞ願ぐはとこしへに

なれを友としよろこばん
たゞ願くはわがこゝろ
とこしへまでも變らざれ
なれを友としよろこびて。

わがこゝろ

風をあらみ
浮世の波にさそはれて
うは濁りせるわがこゝろ
暫しは月よ居すまひて
清きすがたを宿せかし。

水際のすみれ

曉やみの霧はれて
谷の清水の底清し
水際にさけるつぼすみれ
影をさやかにうつしけり
しばし汲む手もたゆたひつ
ゑみし少女や人なりし。

友人某に與ふ

其一

いざや君

たゝびん

猜疑の暗鬼

住まぬ國に

何處にもあれ

鳥なかずとも

花咲かずとも

月照らすとも。

其二

父は子に教へて曰く
わが子、こゝろせよ

門を出れば
敵あり七人

その子は老いぬ

父となりぬ

教へて曰く

わが子、こゝろせよ

門を出れば

敵あり七人。

其三

もろともに

神にいのらん

あはれ世の人

神をわたらふ

せめては人を

信ぜんことを。

亡友を懐ひて

君とわれも

幽明、境をへだつれども

われ君を懐ふやいやふかし

われ天を懐ひ

君と世に在さず

高きにのぼりてたゝずめば

天のはるく、雲きえて
悠々たり蒼空の色
夕照遠近にみちぬ
君を懐ふて感に堪えず
徘徊俯仰願望する時
時の羽風耳邊をかすめて飛び
永遠の俤眼底に動きぬ。

夏來りぬ

丘の白露ふみわけて
のぼる朝日をむかへなん

青葉かざして日の光
めぐらむまでに仰ぎなん。
あだなる夢はさめはてぬ
わかき心は躍るなり
のぞみは高し天津空
思はひくしあゝわが神。

そのうた

夕ぐれ時をかなしとて
泣きつるわれをわぎもこが

泣きて歌ひて慰めし
歌のかすく、忘れねば
一人うたひて一人ゆく
其歌かなしいかにせん

若鳥

翼をれにし若鳥を
あはれと君もおぼすべし
此世の望高かりし
ますらをのこの翼をば
うちし獵夫きつや誰なりし

憎しと君はおぼさずや。

我身

波に漂ふ木葉なり
月にこがる、胡蝶なり
我身一つをたとふれば
木葉たゞよふ波荒く
胡蝶こがる、月高し
あはれ我身をいかにせん。

晃山の春

高峰たゞよふ朝霧に
白銀つゝむ雪晴れて
朝日まばゆくてりはえぬ
梢の小鳥聲清く
池のさゝなみ影あかし
みぎはの花も咲き出でぬ
川すそ遠く眺むれば
空もかすみて見えわかず
都の春や老いぬらん

行雲流水

人里遠き深山にも
笑ひて咲けるすみれあり
浮世はなれし此村の
こかけに眠る墓もあり
高嶺たゞよふ雲あはく
谷を流るゝ水清し
わが身一ついかにせん
わが身一ついかにせん。

人のすみか

人のつくりし浮世より
のがれいづべきすべはあれど
人をつくりしあめつちの
外にのがるゝすべやある
人の獄舎は浮世なり
人のすみかは天地なり
神をば知らんすべもがな

雲影

さいなみ立たぬ湖は
雲の影こそ映るなれ
ものを思はぬわが心
天津御空ぞ映るなる

たき火

一
返子の砂山草かれて
夕日さびしく残るなり

沖の片帆の影ながく
小坪の浦はほどちかし。

箱根足柄、雪はれて

こがねの雲をいたゞきぬ
ゆふばえ映る汐ひがた
飛びかふ千鳥こゑさむし。

落葉たゞよふさとがはの
葦間にのこるうすこほり
ふみて碎きて飛び立ちぬ
羽音したかし、しぎ一羽

小船こぐ手もたゆみたり
富士の高嶺を見かへりて
今日も暮れぬとふな人の
歌はきくべしたび人も。

二

濱べにつどふわらべあり
みるま忽ちおのがじ、
水際あさりてゆき、せり
拾ひし木々を積みあけぬ。

潮風さむし身に染めば
わらべは小枝をりそへて

たき火いそぎぬあやにくに
ひろひし木々はうるほへり。

かたみに吹けど煙たち
たばしる涙ふきあへず
かたみに笑ふ隙くれて
かはたれ時となりにけり。

ゆふぞら晴れて星一つ
影をさやかに映すなり
千瀉の千鳥みえわかず
相模の灘は暮れにけり。

節あり、あはれ歌のごと
童は水際に立ちならび

「伊豆の山人ふきおくれ
野火をいざなふ風あらば」。

鬼火か、あらず、いさり火か
伊豆の山こそやけそめぬ
冬のたび人ゆきくれて
のぞみて泣くはこの火なり。

わらべは指してうれしけに

もろ聲あはせうたひけり
「伊豆のやま吹きおくれ
野火をいざなふ風あらば」。

かはたれ時の濱遠く
罪なき聲はたゞよひぬ
濱の女神はこたへせり
みちくる汐はさゝやぎて。

四

童わらわのかへり遅しとて
母なる一人よび立てぬ
「夕暮さむしいつまでか

淋しき濱にあそぶぞ」と。

稚き童けにもとて
砂山さしてかけゆきぬ
つゞく友どちそのまゝに
たき火を捨てゝはしりたり。

かしらの童ふりかへり
濱のこなたを見おろしぬ
風は炎をいざなひて
今しも荒く燃えたちぬ。
うれしとのみは思へども

童はそこに居ならびて
わが火もえぬと叫びつゝ
家路をさして馳せさりぬ。

五

海暮れ野くれ山くれて
冬のさびしき夜となりぬ
逗子の濱べは人けなく
あるじなき火の影あかし。

と見る、人あり近寄りぬ
足おと重したび人の
たき火慕ふは袖ひぢて

かわかす間ひまもなかりしか。

火影にうつる顔くろく
額にきざむ皺ふかく
六十路むそぢにあまる髯枯れて
衣のすそはやぶれたり。

ふるさと遠くたびねして
ゆくへも知らずさすらふか
ゆめは枯野にさめやすく
草をまくらの老いの身か。

六

あはれ此火よたがわざぞ
かたじけなしとかざす手は
炎まぢかくふるひたり
まなざしにぶく見まはしぬ。

身うちの氷とけそめて
心ゆたかになりにつけり
燃ゆる炎のかなたには
昔のわが身うかびたり。

渚ゆたかに満ち來なる
汐はまさごとしたしみて

さゝやく音はおのづから
おきながなみだ誘ひけり。

仰ぐ大ぞら星さえて
霜をつゝめる天の河

伊豆の岬をゆびさしぬ
天のはるく人こひし。

七

ひぢし衣もかわきたり
残りすくなに燃えつきぬ
たき火の炎かすかなり
おきな今はと、杖とりぬ。

小坪のかたは道くらし
ゆき去りかねしたび人は
あとふりかへりたゝすみつ
たき火のぬしをことぶきぬ。

有明ちかく月さえて

逗子のうら人夢ふかし

伊豆の孫山火は消えて

いざり火のみぞのこるなる。

里のわらべがたきし火は

さすらふ人の足跡は
とこしへの波おともなく
夜半のみちしほかきけしぬ。

鎌倉妙本寺懷古

夕日いざよふ妙本寺

法威のあとを弔へば

芙蓉の花の影さびて

我世の末をなけくかな

法のよおきてよ人の子よ

時の力をいかにせん
永劫の神また、きて
金字玉殿いたづらに
懐古の客を誘ふかな。

梢の鳩のうたふらく
ありし昔も今も尙ほ
夕日いざよふ妙本寺
芙蓉の花は美なるかな。

堇

野邊の小路こみちに咲き出でし
堇の花は今日もまた
君がかざしとなりけり。

胸の思を如何にせむ
歌ひてもらす術すべもがな
君が奏づる琴の音の
調は合はす由もがな。

ただ歌人を憐れみて
暫時しばしは君も聞けよかし

蝶

花に狂ふ蝶の羽風のたよりにも

君がことづつて聞く由ぞなき

秋風戀

朝な夕な身にしみまさる秋風の

悲しき戀を今ぞ音に泣く

かりがね

鳴きつれてゆくがりかねの行方さへ

知らではかなき戀に朽ちぬる

夢

こしかたの夢に焦る、現世の

戀てふものは夢にぞありける

沙漠の雨

駱駝あり、東の國より歸り來りぬ。沙漠に住める駱駝之を迎へて、其群團に入れ、東方の奇事を問ふ。歸り來りし駱駝答へて曰く、

『東の國は草木繁り、人多く住み、此地の如く淋しからず、且つ不思議なるは雨といふものあり。』

『雨とは如何なるものぞ。』

『雨とは天より落つる水なり。此水の落つるに先つて雲といふもの現はる。』

『雲とは如何なるものぞ。』

『あ、雲か、雲か、口にて言ひ表はし難きものを雲といふ。』

群團の駱駝、起つあり、伏すあり、一齊に曰ふ、是非其雲なる者、雨なる者を見たいし、之れを我等の神に祈らんと。

茲に彼等は月の出づるを待ちぬ、月は彼等の神として崇め拜するものなり。東の空

より月出でぬ。皎々として白沙萬里、さながら光の海に似たり。老いたる駱駝祈りて曰く、

『我等が尊み奉る美はしき神よ。願くは雲なるもの、雨なるものを示し給へ。』

雲悠悠と涌き出でぬ、雨蕭々と降り出でぬ。千里萬里、際限なき沙漠に、風なくして蕭々と降りしきる雨の光景の如何に寂寞たるよ。嗚呼如何に淋しくも亦た悲しげなる光景よ。

雨は三晝三夜、降りつゞきぬ。長天濛々、日の光を見ず、月の光を見ず。初めがほどは駱駝の群團も物珍らしく眺め居りしが、遂に畏れ惑ひ、聲を擧げて叫び出でぬ。

『神よ、光の神よ、雨なるもの雲なるものを收め給へ、我等をして永久に光の國に住しめ給へ！』

彼

一 二人は相ならびて歩みぬ。しばらく言葉なかりき。彼は心に激するところありけん、肩は擔ひし杖をはづして強く地をうちたり。しかも打ちし彼はこれを知らざりき、傍に歩みし男は杖の音をききて竊にうなづきぬ、心に思ひ當る節やありし。

二 口にくはへし葉巻を右の手にうつして、何ごゝろなく窓より頭さしいだしぬ。月雲間より出で、大空瑠璃の如くに晴れて、澄みわたる光清く、其尊さに、彼は煙ふかして眺むることの瀆すわざなるが如くに感じ、直ちに煙草を窓より投げ捨てたり。

三 人生、至る處青山ありとは、彼が心に限りなきの自由と同情とを感ぜしむる詩想なりき。彼はこれを空想たるにとゞめずして、實行の上に示しぬ。彼が生涯は漂泊的の

ものなりし。日本國土、南は九州より、北は北海道に至るまで、到る所に彼の足跡あり。

四

精神的の情死を遂けたる男とは實に彼の事なり。彼が學校に在るや、能く論斷し、能く斷行し、甚だ敢爲の若者なりき。されど彼女と結婚するや、其理想は實際となり、其理想は死亡したり。彼の一生は妻と共に笑ひ、泣き、語り、食ふことにて了りぬ。友の一人は曰く、彼は幸福ものなりと。然り、彼は、幸福もの、み。

五

田園の中央に一茅屋あり、防風林其の地をかこみ、一流の清き小川の藪の右よりうねり出で、家の前を過ぎ、これに三枚の厚き板より成る橋をかけたなり。冬は雪この家を閉し、窓よりは燈の光洩る。夏は牧牛十數頭、此家の近傍に徘徊す。これ彼が夢想の中の樂園にぞある。此理想を追うて彼は北に走りぬ。

六

左より光かすかなる燈、彼を照し、右より清光流水の如き月、彼を照しぬ。彼の眼

は書の上であり、其半面はや、紅く、其半面は蒼白なり。傍より此様を見る時は、畫工は尊き美術品を得たりと言はん、されど彼が心には今しも恐ろしき戦ありて、彼の唇のかすかに動きつゝあるを誰か知り得ん。彼は人なり、美術品に非ず。

夜は更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたにかくれ、蒼白く見えし彼の半面は暗くなれり、燈の油も盡きなんとす、彼は影の如く坐せり。されど一枚より一枚と、其書は讀まれ讀まれて次第にのこり少になりぬ。彼の眼の光はいよく、鋭し、其心には戦絶えざる也。

七

此村は一目にて其貧しさと寂しさを誰も知り得ん、僅に十六七戸に足らぬ家數を一村に組み、人口九十と言へど、老少三分の一を占め、のこりの數は半は婦人なり。家々の立つ處は山のかげならずば川岸なり、川には水少なく石多し。山は瘠せたり、然るに此村にも一軒の校舎あり。朝な夕なに集る小兒の數は十六名なり。

八

彼には人の生涯といふものゝ、いよく不思議にのみなりまさりゆきぬ。おのが身

の過ぎこし方を思ひ、この天地の間に於ける命運の怪しき力を感じることに今年の夏の夕暮は去年の冬の夜半にもまじたり。見る人、聞く人の上、怪しからぬはなし。友は逝きぬ、月はめぐりぬ、今日も昨日も時はやみなく翔るなり。其羽音の耳邊を掠めゆく様の物凄さよ、あゝ人の一生、これ何者ぞや、朝なく、起きいで、暮しつ、夜なく、夢に入りてまどろむ、彼もしかり、われも然り、あゝ人の生涯てふものほど不思議なるはあらし。おそろしき事實なるかな。

九

此處にて彼女等と別れつ。

『戀愛』の夢を後にのこし、『自由』の夢を前に描きつ、悲哀と希望との感に満たされて行くわが彼時の心をいつまでか忘れむや。とある崖の上に車とまりし時、眼下に濶けしは縹渺たる那須野ヶ原なり。雲霧くらく垂れて其天際を閉しぬ。眦を上げて之を見わたせし時のわが心をいつまでか忘れんや。

戀しき少女を後に残し、自由の地を前に夢みつ、われは悲み、誇り、眼を見張りて大空をみたり、蒸すが如き雲の間よりも、秋の初めの澄みに澄みし蒼天の尊さよ、

あゝ彼處に自由の少女われを招くと詩めきたる句を小聲に獨語せし時、一滴の涙落ちたり。これ少壯の者ならでは知らざる涙なり。

十

『われは奈良へゆくべきか、湖水をめぐるべきか、北の方、山深くわけ入るべきか。また南に下りて須磨明石、水島などをえらばんか。皆わがこゝろのまゝなり。いづれかわれを抱く自由の母の懐ならざるべき。』かくかたりて、彼がこゝろに若き人の血をどりぬ。

十一

彼がこゝろには過ぎし日の彼處、此處、暗るが如くに浮びいでぬ。

歌志内、空知太、其の沿岸、札幌、鹽原、柳井、麻郷、佐伯、船木、岩國、逗子、萩。

數千枚を盡しても書きつくし難きほどの詩料は、これらのうちにみちあふれ居るなり。

十二

かまどノよりたちのぼる煙は何れも此美しき秋の大空に消えてあとなしといへど、石狩の野に住む人の品ほど數變れるは稀なり。自由を夢みて手より鋤とることをいなまぬ若き人、はでなる都の交際に加はり兼ねて世をこゝに遁れし哀の族、狭き本道にすら身を立て兼ね、黄金の山を夢みて走込みしならずもの。

十三

わが家の後の丘に一本の松あり。枯野のなかに淋しく立ちて其影長く夕日に倒れしを見るとき、わが心ひとしほの哀を覺えぬ。

わが友としては此松のみと歌ひし事もありき。風の音、梢に、遠き國の笛吹くを聞きては其の根に坐して物思ふわが眼、何時しか天外の雲に及ぶ。雲の彼方には少女住めり。

此少女より來りし玉章を讀むにふさはしきは此松の傍のみ、讀み了りて泣くも笑ふも此松のみぞ知る。われ屢々思ひき、今より幾年の後、此松の根に小さき墓一つ立ち、其石に白き苔つきて半は土に埋れんするを、百年の後、年若き詩人見當りて、松に向ひ、此墓に眠れるは如何なる人なりしぞと問はゞ、松如何に答へて語るべきぞ。心あ

る松は言ふならむ。御身の如き年わかき詩人にておはしき、三十に足らで死し、讀みし歌の數々、紙に誌されしを悉くわが根にて焼き、其灰は木枯に吹かれて散るを詩人見やりて『永久の悲』てふ歌聲高く歌ひしが、二日許りにて身まかり、かしづきの翁其かばねをわが根に埋めて去りぬと。

嗚呼わが空想のあやしさを。

落日に對す

二十三日及び今日、日没前に室を出で海濱にいたりて逍遙しけり。日將に箱根の山脈を越えて彼方に入らんとするを見、枯草の上に横臥してこれを目送せり。

余が願は天地の不思議を痛感せんこと也。

故に余は其心を以て此落日に對しぬ。相模灣をへだて、伊豆の連峰、箱根諸山、富士山に至るまで悉く眼前に横はる。

黄金色の雲、此等の山頂にかゝる。水光天色相映す。眞紅の光線紫嵐を縫ふ。目近かには白浪白砂にころがる。仰けば底深き藍色の大空に淡然として月夢の如し。日は次第に山にかくれ初めぬ、眼を定め靜視する時、日動く如くして動かす、地動かざる如くして動き、山を載せ海を載せて轉ずるを感ず。吾れ天地の色を見たり。又其の運動を見たり。自然の美と力とをかすかに感じ得たり。されど吾れ依然として煩惱の幻影の裡にあり。吾れを吐吞する天地不思議の中に在らず。

生とは何ぞ。死とは何ぞ。自然とは何ぞ。吾れとは何ぞ。人生の意義如何。との大疑問は依然として吾が感情の上に何の力もなし。されど自然已に吾れに近し。

鎌倉の裏山

田山花袋君の來遊に先だつて、或日余は原田東風君と散歩に出で、近郊を經めぐつて面白い所を發見し、是非花袋君を此處にともなひたいなど語り合つたことがあつた。其面白い所といふは、大佛の左から藤澤道を行くこと七八町、又左へ折れる田圃路の田溝にかけし丸木橋を渡りなどして丘へと登り、其丘の頂まで耕されし畑の間を峰づたひして極樂寺の谷に下る此間約一里ばかりの散歩地であるが、ツマラぬ所と言へばそれまで、我等如き田舎に生れて田舎に育ち、今は都會に住まねばならぬ身には却つて斯ういふ所が嬉しいので、里は近いし、煙は立つし、麥畑の盡くる所は林、林の間から海が見える。海には帆かけ船、磯うつ浪の白い線が遙かに光つて居る。どうしても子供の時、綻びを切らして駈け廻つた所と變らない。おまけに三國一の富士は浮び、相模の大山は霞み、伊豆の天城は煙ぶつて居るといふ多少名所が、つた圖もあるのである。

其處で手紙の序に此事を書いてやり、來遊を促すと旅行すきの花袋君、早速やつて來たのは土曜日の午後、其日は朝から雨の頼もしくからぬ天氣であつたのが、お晝時分から晴れそめて花袋君の着いた頃は淡々しい雨雲がふわ／＼と沖なる空を漂ひ、夏の初めの穩かな日影や、西に傾いて鎌倉山の新緑を鮮かに照して居たのは我等に取りて何よりの喜びであつた。

さて翌日になると快晴、所謂あつらへむきの天氣、日曜日のことゆゑ、一日の閑遊と出かけた都會の紳士も少なからぬ様子であつた。起きると先づ大佛の邊まで散歩を試み、十一時ごろ、三人連れ立つて例の散歩地へと出向うた。

大佛の門前より大佛坂の切通きりどほしまでは爪先上りの道、道幅二間位荷車の轍わだかまの痕深く土を掘りたる左右には杣山の聳えたる、其麓には所謂る猫の額ほどの畑の段をなして作られたる、『旅をすると能くこんな道に出遇ふものだ、向の山を一つ廻ると宿に出られるなど考へながら重い足を曳すつて日の暮れ方に歩いたものだ』と言つた東風君の言葉は此道の真相を穿つて居る。大佛坂の切通しは鎌倉の地質にして初めて作り得るといふべきしろもの、左右の絶壁數十間、其頂から差出た若葉の色の鮮明なる、狭く長

く限られた大空の、いや高く仰がれて、其色の初夏に似合しからず深碧なる、みな佳し。切通を出ると下り坂、春ならば鶯がほがらかに鳴いて居さうな谷間に出たが、鶯は啼かず、蟬の聲ひときは騒がしく、頬白が遠くで囀つて居た、此道をだん／＼下つて往くと瓦を焼いて居る家がある、この家を最初に、引續いてバラ／＼と田舎家の一村にかゝる、其中程に例の章魚をつるし、精進あけを並べ、こもかぶりが三樽ばかりの居酒屋、兼、村の若衆の合議場がある。

此茶店の前を過ぎて、程もなく左へ折れて田圃路に入り、田の畦のやうな道をゆくこと二丁ばかりで丘の麓に達した。さて此處の一言せざるを得ないことは、鎌倉のものは野蒜のびるを食はないから野蒜は唯の雑草のやうに田圃に生えて居ることである、兼ねてこれを酒の肴に食ふ筈で味噌まで用意して來たので、田圃路にかゝるや吾々三人で採つた野蒜は都の酒客に見せたい程であつた、採つた野蒜を洗ふ一段になつて、更らに一言せざるを得ないことが出来る、鎌倉近在では娘が花嫁になると、盛装して角隠つゝをして親類縁者さては兼て嫁入り先きの家が往來して居る家に參上挨拶に及ばなければならぬ風俗、所が野蒜を洗ふべく百姓家の井戸を借りることに三人の相談が決定つた

其時此花嫁が丘の麓を、一人の老婦一人の小娘に伴はれて、三人とも日傘を傾けてしな／＼と歩いて來た様子はまるで畫のやう、吾々は一興を催して見て居ると花嫁は野蒜を洗はして貰ふ筈の百姓家に入つて了つた。あたりに家はなし、花嫁の居る時井戸を借して下さいと押入るわけにもゆかず、頗る當惑したが、東風君遂に野性を發揮して先導を爲し、三人づ／＼しく押入り兎も角もして野蒜を洗ひ得たが、花嫁は障子の蔭に坐つて居たので見えなかつた。

野蒜は採つたし花嫁は見たし、景氣好く我々は丘をのぼつた、初夏とは云ひながら、面上から直射する日光はぢり／＼と背をやき、汗はだく／＼流れる、若葉の林の蔭に腰を下ろし、懷を開いて風を入れた時の心地！ あゝ愈々夏が來た、楽しい夏が來たと、思はず叫ばざるを得なかつた。

程なく頂に達する、山の低い割合に眺望が廣濶なので、田山君を驚かした。北の地平線は武藏野、極目さへぎるものがない、また大山よりかけて武藏の國境をめぐる連山！ 箱根足柄の諸山よりかけ伊豆の岬角に連なる山脈！ 此等の諸山を壓して立つ富士！ 大磯小磯の濱つゞき、峰づたひに眺めつゝ、路、林に入れば憩ひ、林を出づ

れば大洋！ 水平線は思ひがけない所に高く一線を劃して居る、小坪、葉山の磯は指
 點すべく、三浦の岬は遠く水平線に没して居る。

刈草を背負つた村娘にも出遇つた、夏ならば瓜や茄子の花盛りと唄はれさうな畑で
 一人の男が土を掘つて居る、鎌倉の歴史は古いが自然は常に新しい、我々は鎌倉のカ
 の字も想ひ出さなかつた。

程よき松林を見立て、鼎座し、包を開くと中から現はれたものが麩麩にバタ、鎌倉
 ハム、夏蜜柑、冷酒が一壘、いかに酒を飲まぬ人でも、今吾々が林の奥からそよ〜
 と吹く風に吹かれ、草木の高き香にうたれ、富士山と太平洋の水とを我物顔にして飲
 んだ一杯の冷酒の味を知らしたら堪るまい、野蒜はうまかつた、自然はチーズチース
 一卷を懐にした謹嚴な人ばかりに親切ではないらしい。感謝す、野よ山よ大空よ大海
 よ、どうか我々は林の中にあぐらをかいて、冷酒三杯に舌鼓を打つて、自然の賜を感
 謝する程の野性を何時までも失ひたくないものだ。

食つてしまへば用はない、歸らうといふのが我々の流儀で頗る殺風景であるが實際
 だから仕方がない、ほろ酔ひの心地たのしく又峰つたひ、眺望絶佳の處へ来て、此處

でやれば可かつたと叫んでも手に残るものは風呂敷ばかり。

大くたぶれに疲勞れて家に歸れば、二時、風呂が沸いて居た。

新らしき年來れ

本年も残り少なくなつた。自分は三十一歳になるのだ。今日までに何を爲でかしたかと顧みれば實に情ないやうである。文章の二ツ三ツも作つた、小説の一二篇も書いて見た。そして幾何の金銭と多少の讀者とを得た。それだけである。其外に何があるか。

勿論、人の一生を通じて其成績を計算し來れば如何なる人物と雖も高が知れた者には違ひない。悠久なる人類史上より見れば世の大人物といはるゝ程のものと雖も僅かに其一頁を埋めるに過ぎないだらう。しかし其が即ち人の一生ならば是非もない事で、吾人一生の立脚地は此事實の上に立てるより外はあるまい。

即ち人は其理想の光を追うて、各人其分を盡すといふ事が、結局の處世法となる、言ひ換ふれば安心立命の歸趣となるのである。

が是れだけでは何となく漠然として振はざる心地がして、吾人の心の底に氷の一片を藏して居るやうではないか。

此道念を思つて其極致に至れば人の心は冷鐵を以て壓せらるゝ、感ぜずんば止まな
いだらう。

其處で自分は天父に感謝するを禁じ得ない。吾人の靈を導いて此壯なる道義の氷宮より脱せしめ、希望と歡喜とを合せて與へ勇氣と謙遜とを調和せしめ、益々其の領域を廣むると同時に貧富の差等は愈々甚だしく、少くとも個人が此差等を自覺するの情は益々高まりつゝあるのである。

而して徳義の問題は千古一の如く、未だ萬人の満足と信仰を繋ぐ程の解釋を得ず。不思議無窮の天の依然として此世界を覆ふを見る。

斯くて人類の命運は如何。あゝ、國家！ 要するに何ぞ、生民をして其の心身の安んずべき處あらしむるの外、亦た目的あらんや。我日本は今正に此目的を一より一と解釋すべき場合に立居る也。

心胸を廣うせよ。眞面目なれ、我政治家、文學者、及び宗教家よ。殊に我が青年よ。安閑として一日を空うすべき事は。立つて汝の分を此目的の爲につくせ。

事業の計算以外、更に高く、更に深き處に吾人日夕の行爲を勵ます動力は即ち、神

在す、神は愛なり、神は父なりとの信仰であることを。

さて自分は書いて此處まで来た。顧みて此信仰を値するほどの徳を立てたかといふと、否と答へるの外なきを知つて、自分は今更の如く、わが信仰の如何に淡かつたかを嘆ずるのである。

どうせ不完全の人なれば、自分とても數々然と自分の非を數へ上げて泣くの愚なるを知つて居る。先づ大ザツバにやる方がよいと自分は兼ねなく感じて居る。

其れにしても自分のは餘り大ザツバではあるまいか。餘り不規律ではあるまいか。餘り出たらめではあるまいか。

神の法則は斯る不規律を許さない證據を自分は幾度も經驗した、二二が四と云ふ法則は神の法である。

夢のやうな信仰に伴ふ夢のやうな歡喜は藁を燃すと一般、忽ち火忽ち灰、其變化が餘りに果敢ないではないか。

其處で自分は裏には信仰の火絶えず燃え、外には此身を律する處の人爲の法則を立たい。今少しく嚴重なる生活法を行ひたい。

三十三年は逝く。宜しい。三十四年來れ。そして自分は此自警を忘れぬように歩まう。

畫

畫を見るに其法ありや、若しあらば予實にこれを知らず、されど予敢て自ら言ふ、畫は予が命なりと。命とは靈を此宇宙に繋ぐ金線を云ふなり。

小兒の好むものは繪なり、予が小兒の時亦然り、殊に然り、何を與へらる、よりも、繪一枚は予が尤も満足する處なりき。神社に參詣して眞先に予が眼を惹けるは繪馬なりき、馬は殊に予これを好みたり。

予は唯觀ることを好むのみに止まらず、自ら畫かざれば満足せざりき。長じて小學より、中學に進むも、所謂畫學なるものは數學とベースボールと與ともに予が最好の課目なりき。其うち畫學に至りては、殊に甚しきものありたり。

曾て未だ小學校にあるや、予が友にて予より一級高き村田と呼べる少年、コロンブスを寫したる事あり。非常の上出来にて全校大評判となりぬ。校長はわざ／＼額縁を造らせて、コロンブスは教員室の一隅、大時計と並べて高く掲げられたり。

毎日其前に人山築かれぬ。予も亦村田に其大名譽を祝したり、村田の眉の動き方、

異様なりき。唇固く閉ぢ、一種の顫ひは、口の周圍より頬の肉に波動せり。予は彼の競争者なりし也。而して彼のコロンブスは全く彼の勝利となりぬ。

コロンブスは鼻の下に髭あり、頤も頬も鬚髯を以て覆はる、满面毛の中に埋もるに似たり。故に之を畫く、其難きは實にひげなり。而して彼村田の技倆はひげに著はれぬ。校長が激賞して措かざるもひげなり。村田自身が得意も亦ひげにあり。予はたゞ如何にして村田が斯くまでに巧妙にひげを畫がき得しかを怪みて措かざりき。

その頃東京歸りの青年あり、大學豫備門にありしも故ありて歸國し、小學校の近傍に住めり、教員諸氏と來往し、村田も何時か彼と親みぬ。村田がコロンブスのひげは全く此豫備門先生より傳授したるなり。予は村田に就きて予にも亦、其祕法を傳へんことを求めたるなり。幾度か懇勸に懇望せしも、彼は只だ微笑するのみ、決して予に教へざりき。予は残念の事に思ひ、獨ひとり工夫を凝して、書きては破り、書きては裂き、ひげの練習に全力を注ぎしも、終に村田のコロンブス程に至る能はざりき。其後間もなく予は中學に入りぬ。

予が寄宿せる小學校は父母の家を隔つる八里餘の都會にあり、夏期休暇に歸省し、冬

期休暇に歸省す。八里の道程たゞ山のみ、急坂斜に山腹を辿ることあり、深谷を下瞰して泡立つ溪流、湛へし淵、絲の如く懸る瀑を看て行くことあり、參差たる灌木の林に包まれて路傍に立つ茅屋を顧ることあり、鈴の音を山彦に響かせて煙草スバく、放歌朗々、向の山かけを來る駄賃馬子に出遇ふことあり。颯々たる山谷の風を長へに吸て、百年の龍影を岩石の上に投ぐる老松の下に二三の小兒が嬉戯するを見ることあり。山廓つらけて平野茫々たる處、夏日まさに天に沖して微風そよがず、蒸し暑き草の氣に打たれ喘ぎくくして歩む樵夫を見ることあり。歩むに連れて、山野溪流次第に其趣きを變ずるを眺めて進むことあり。一種のチャームは恒に予を動かし、形、色、光、影は、意味深き謎語の如く予の眼に映じ、予は一心唯だ如何に畫かば此謎語を解き得るか、と、其れのみを思を苦しめ、苦みながらも、夢みる如き愉快に耽りて、八里の難路も長きを覺えざりき。嗚呼當年のこと煙の如く消えぬ、瞑目して眼底に描き得る者は、風呂敷包を負ひ、白のメリヤス股引を着け、草鞋覺束なく踏みたる少年が、みぞれ蕭々と降る寂寞の境を、茫然四顧して辿り行く光景なり。予は此想像畫に對する毎に怪しき暗愁の雲に幽かに泣く。

一 昨年の春より、昨年の春にかけて、予は郷里にあり、珍らしくも一秋を田舎に暮しぬ、予が樂は同じく畫なりき。

予に弟あり、畫に熱中すること或は予に愈まる、予の東都に留るや、彼に畫帖を贈りしことあり。昨年予は彼と廣島市に旅行したり、二人の間に最多く購はれしものは畫なりき、二人は土産にまで畫を用ゐぬ。

予は彼と談じて各一枚の畫板を造り、二人遠行して山野を跋涉し、或は近郊を漫步する毎に必ず之を携へ、感に觸るゝもの、直ちに鉛筆に上しぬ。田舎の秋は最も畫に適す、一日、待ち受けし日曜日は到りぬ。予等兄弟、畫板を負うて家を飛び出で、箕山と呼ぶ近郷第一の高山を攀づ、森、藪、藁屋、耕人、柿、楓、案山子幾枚の下畫、行くく、筆に上りぬ。

此山海に突出する岬の脚を爲す。頂平圓にして秋草遠く半腹を覆ふ。瞰下せば周洋三十六灘の水脚下に開け、微茫煙浪、遙かに鎮西の諸山を眉の如く引く。白帆、漁舟、長汀、曲浦、島嶼、岩礁悉く畫ならざるはなきも、予等兄弟只だ斯る縹渺、空濶、雄大なる天然の前には、恍として自失するのみ。此日予は馬島、牛島、祝島を畫き、弟は

佐伯島長島を畫き、予又上ノ關、室津間の海峡を畫きたり。畫き得たるもの固より見るに堪へず、兄弟相顧み互に嘲り笑ふと雖も、猶ほ筆を投ずる能はざる所以は何ぞや。筆とるものは拙き筆なれども、筆とらしむる者は自然なればなり。否、自然を戀ふる人間の靈なればなり。予自身其故を知らずと雖も、小兒の時、少年の時、馬の圖に對する毎に或る魔力に打たる。悲馬風に嘶く圖、鬣を北風に波打たせて昂然として巖上に立つ馬をみる時は、わが心誇りて躍りぬ。花落ちて江堤、草煙の如き處、三歳の神駿蹄を揚げて去るを見る時は吾が血湧きぬ。曾て父大阪に上り、土産とて一本の扇子たまはる、開き見れば野馬數十を畫きあり、或者は馳せ、或は嘶き、或は二足立そくたちに跳る、予は小躍りして喜びしことありき。

船の圖は普通の趣味に適ふが如し。何れに行くも船は能く畫題となる。予も亦甚だ船の圖を愛したり。自分も好みて畫きぬ。暮潮夕陽に融けて金を流すが如く、大船錨を投じて寂として灣頭にかゝる、水天相接する處歸帆遅し、かゝる圖に向ふ毎に腕白なる予れ、心も空となりぬ。

されど今や予が畫に對する感想の、大に變化したるを覺ゆ。哀しき變化は年月と共に

に來りぬ、紅顏の頬の肉の落つると共に、動もすれば冷かなる涙の、蒼頬をつたふと共に哀しき變化は寒霧の如く、畫に對する感想の上に掩ひ始めぬ。曩には予畫を好みたり。されどそは自然なりき。馬の圖、人物畫、山水畫、船舶の畫、茅屋の畫、破宮古跡の畫、薔薇花の畫、夕影の畫、水車の畫、之に對する予は自然なりき。形、色、光、影の巧みなる配合の前にはわが無邪氣なる心無邪氣に躍りしのみ、予はたゞ花に眠る胡蝶の如く、或る自然の馨ばしき香にうたれて酔て自ら知らず、夢みて自ら知らざりき。

されど嗟可憐なる少壯の者よ！ 予敢て自ら可憐と呼ぶ、渠生れて地に墜つ、年を閱する二十一年、樂き自然の夢全く破れぬ。畫に向つて輝きし渠の眼、今は畫を觀て暗涙を湛ふるに至れり。畫に對して叫びし渠、今は黙して沈思するに至れり、畫を觀て樂しむは一なり、今も畫は渠の生命なり。唯曩には食物の如く然り、今は病者に於ける靈藥の如くなりぬ、此世界の重苦しき、薄暗き、殘忍極まる、鮮血漂ふ、迷路繁き人生の旅行は漸く渠の前に現はれ來り、滿眼四圍の光景事々物々悉く新らしき説明を渠に求め始めぬ、畫も亦新らしき異色を渠の前に呈し、深くして悲しき意味を渠に私語ひごくに

至れり、渠の靈は傷き渴きぬ、渠此私語を聞く時は、一掬の活泉を得たるが如し。
 馬の圖、船の畫、只だ夫れ馬の畫、船の圖にして止らず、茅屋、耕人、古跡、森林、
 小兒、長汀曲浦島嶼の畫、只だ夫れ茅屋、耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦島嶼の
 畫にして止らず、孤兒が亡き親の畫像に對する如く、其うちに回顧、紀念、想像、默
 示の深き悲き遠き幽なる音を聞くに至りぬ。

予此頃小川町の某畫舗に一枚の畫を見出しぬ。そは椅子の上に二人の小兒、一個は
 四歳許りの女兒、一個は二歳許りの綠兒、相並んで眠り、母とも覺しき一婦人、椅子の
 陰に立ちて此なたを正視せる様を畫けるなり。すやすやと眠る小兒、結ぶ何の夢ぞ。
 眠りの神、彼等の爲に謠ふ何の催眠歌ぞ。小兒、無心、眠、夢、知らず何の詩ぞ。然
 れども予は此畫に不満あり、そは小兒の母小兒をみずして吾等を眺むることなり。予
 は此母が眠れる小兒を熟視して、其優しき眼の裡には處女も男子も決して想像し能は
 ざる無限の哀思を包まんことを望む者なり。

ミカエルはウオーズウオールスの傑作なり、予若し能ふ可くんば自ら之を畫かん事
 を思ひ立ちぬ。彼ミカエル、如何に畫かば、詩中のミカエルと等しく現はるべき。ミ

カエルの兒、群羊、牧草、溪流、連山重疊、蒼穹一點の鳶、如何に點出せば、予にヒ
 ユマニテの幽音悲調を傳ふ可き、嗚呼予が手畫筆を捨て、已に幾年、内硬くして再
 び畫くに由なけん。已んぬる哉、いさゝか筆を鉛筆に更へて幽懷をやる。

驟雨

本所からまだ汽車の出ぬ頃、自分は千葉で一泊し次の日は東金、健脚の人なら半日の行程を午後二時までか、つて漸くに辿りつき、夏の日盛ではあり草鞋喰の痛み堪へ難く、何も急ぐ旅ではなし泊れと、町端れの旅人宿の砂埃で眞白な上あがりぐまら櫃へ腰を下した。足を洗つて二階へ通されて見ると、昨日からの疲勞が一時に出て、何時眠入つたとも知らぬ間にがたつく障子の響、眠い眼を微に開けて四邊を見廻はす時しも、店の時計が緩に五時を打つた。それにしては薄暗い、まだ太陽のある筈だがと起上つて欄干に溶けさうな身體を投げかけ外面を覗けば、空は一面の黒雲墨の如く、吹く風の的なく迷うて軒先の柳怪しく鳴り、驟雨襲ふべき光景である。

宿驛は田舎の都、東金も一筋町の中程迄来れば、可成綺麗な商店軒を並べて家並も揃うて居れど、打見たる此場末は苔白き瓦屋茅屋の高低定まらず、開口廣く老舗とも

見ゆるが住む人はと問へば、六十の婆と孫の二人きりと云ふかも知れない。水を撒かぬ往來を夏の日の一日駄馬の蹄で蹴立てられては廂から店先き、物として灰を浴びざるはなく、眞向うは菓子屋、東京バンと障子の薄墨からして情なく、左が鍛冶屋右が紙屋で前に草鞋がぶら下けてある。瘦狗一疋走りゆく後から汚物に群がる蠅が急に飛んで逐駈けゆく。以上見てこれぞと面白いもの、楽しいもの、晴々するもの唯一つでもあるか、驟雨、驟雨、この不快を一度に洗ひ流すものは！

下界を壓する空氣重く陰にこもつて打つ鳴神の攻太鼓轟きそむれば、先鋒の風伯かぜのかみは往來に散亂する藁切、紙屑の類を一つに纏めて虚空に捲上げ、忽ちフイと撒き散らしゆく。一粒二粒落ちて来た。暫しばしは向ひの家並さへ見兼ねる程の激しい雨、斜に白く黒く縞を立て、降る勢すごく、煽られて舞込む雨霧冷やかにわが面を掠める心地よさ！それも亦直ぐ止む驟雨と思へばこそ。

旅人に取りては晴れゆく雨の名残を見送るほど胸のすくものはなく、それも亦この小氣味よい驟雨なればこそである。

西に天際から雲切れがすると瞬く間に大空拭ふが如く晴れわたり、傾く日の光の一

際鮮やかなるに映じて萬生々として來る。子供は歡呼する。背戸の雞は羽搏をして時をつくる。飴賣の笛は高く響く。向の鍛冶屋の鐵砧かねぢ勇ましく火花を散らす。羽蟻はつりまでが藁屋の前で輪を作つて舞ふ。

新調の番傘を日傘に、半ば身を隠くして顔はよく見えぬ村男の我宿の前に立停つて主人と二語三語大聲に『結構な驟雨』を繰返す、其後からしよんぼりと店先に入つて來た一人の旅客、自分は其様子を見て直ぐ我仲間と覺つた。果して『お合宿を願ひます』と下婢の挨拶の終らぬうち其處に現れたは渠。『書生さん同士お合宿は却つてお賑かで。』と手前勝手な捨臺辭を受けて『何卒よろしく』と氣の毒さうな、どこか世慣れぬこなし。肉瘦せ骨高く年齢は二十四か五か、荷物は風呂敷包一つ、別に肩から古靴をさけて耳には鉛筆を挟さんで居る。

二

其夜は濕かに語つて一時のうつを自分は聞いたが、其後は知らず、五時ごろ自分は目覺めて頭を上げて見ると渠は夢尙ほ深く、さなきだに色艶悪しき顔の死人かと思はる、まで蒼白きをつくづくと見入りて、今更彼が昨夜の告白コソフエツシヨシを思ひ出し、冷かなる涙

の我頬を傳ふを禁じ得なかつた。

東金から八日市場まで馬車、それから先は徒歩で二人は馬子とも話し道草も取つて面白く銚子まで歩み、『未だ日は高いが折角だから君も銚子で今夜は泊れ。』と自分の勧めるのを彼は打消し、『イヤお別れとしよう、昨日の驟雨といひ、昨夜から今日へかけて偶然にも君に斯様に親しく相知つた事と云ひ、僕は近年にない愉快であつた。又何時逢ふ事やら最早二度と逢はぬ事やら分わからないが悲しと思へば悲しいやうなもの、僕は時間の長短が人の交に關係するとは信じない。』と云ひさして暫時頭を傾しけ物思ふ體であつたが、淋しい笑を眼元に浮べ、『紀念と云つては烏く澁がましいけれど、此際別に思ひつきもないから、之を君にお渡しする、後で御覽ください、元來他人に見せる筈のものでないが、君にだけは何となく見て貰ひたい心持がするから。』と一冊の手帳をわが前に出した。自分は強て止めるのも無益なりと思つて遂に手を分つ事として渠は直に常陸に渡り、自分は銚子に逗り其の夜かの手帳をくはしく見ると、其折々の隨筆で、要つまり之渠が自叙傳には相違なきも一人稱を用ひないで、總て『渠』の三人稱を以て書き、我と我身を批評し賞讃し罵詈し冷笑し説明したものである。只一節一節少しも

連続してゐないから何の事やら了解らないこともある。今其解り易いものを一二録すれば、

左より燈光渠を照し右よりは清光流水の如き月渠を照らす、渠の眼は書上に注がる。半面はや、紅く半面は蒼白なり、傍にありて見る時は尊き美術品を畫工は得たりとせん。されど彼は人なり美術品にあらず、見よ、其唇は戦きつ、あり、夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたに隠れ蒼白なる渠の半面は暗くなれり、燈の油また盡きんとす、渠は影の如く坐せり。その書は一枚より一枚と讀まれくゝて残り少なくなりぬ。渠の眼の光はいよく鋭し。其心には戦絶えざるなり。

又た

渠の行末を思へば心痛の至りに堪へず、渠の特質は渠自身を呪ふが如く見ゆ。渠には野心あり、天才あり、されど足なきの野心翼なきの天才なり、進む能はず飛ぶ能はざるなり。常に其心を喰ひつ、僅に其心の生命を繋ぎ居れり。我儘にして高慢なり、而して蝥せる怠惰の慢性病に罹り居れり、其生涯は目的なきの生涯なり、

目的あるが如くにして實は一種の幻影を逐ふの生涯なり。何事をかなさんと欲しつ、も遂に成就する能はざるの生涯なり。

今も昔のまゝなる渠は其後七年ぶり什麼して自分の住所を知つたか、突然書狀の文字すら彼手帳のまゝに、次の一節を手帳の末に書き添へ呉れよと申越した。

渠は空知川の濤に立てり、冬枯の寂寞たる森林渠を圍み、悠々たる蒼天渠を覆ふ、今や死は渠に取つての驟雨なり、渠は皺唄れし聲を振擗つて叫びぬ、驟雨！
驟雨！

想ふに渠は其反響の曳々として空林遠く滄えゆくを耳聳て、聞いたであらう。

無窮の生命

御手紙面白く拜讀せり、例に由て鹿角菜ひじきの行列を見るにつけ、依然たる君が頑冥不靈のほど想やられて情なく候。先日の拙書中にて神の存在を説明する爲めテニソンの一節を引用したるに、其手紙をわざ／＼松村へ持ち運びて宇宙現實の問題を論ずるに一詩人の空想を基礎とする大膽に感服せりと大口開いて笑ひ玉ひし由、君の書中には此事隠蔽しあれど既に松村よりの報告書到來し、始終の様子現はれたる以上は、ダムダムの一丸を覺悟し玉へ、十九世紀の科學といふ奴を楯にする野蠻人にはダム／＼が相當と思はる。

日々氣象臺にて風伯雨師の行方のみ氣にし玉ふ事お役目とは申し條、近頃御苦勞の儀に御座候。然るに先日來いたづらなる鳥あり、君が雨量を測り玉ふ水盤にて恣に行水をつかひ、其事已に數度に及びしとか、其都度君は『又行水されちやつたア』と、鳥が飛び行く吹上御苑の杜を望んで口惜さうに叫び玉ひしと云ふ。此事も君の手紙に

は隠蔽しあれど、同じ松村の報告にて承知せり。鳥の飛び去り際、心地よけに翼をふるひて何と鳴きしやらそこまでは判然せず、我家の小作に宇之助といふ髯面の男あり、失禮ながら何となく君に似たる様思はるれど、但し宇之助の祖父は權兵衛と申せしや否やは余未だ確かむる能はず。

『此 Teia は數ナムバの Intinie といふ事より來る者である、故に無窮無限といふ事を説明するには勢數の連續を説くを要す、君等如き數理の思想なき者はとても駄目だ、併し試みに次の式を見給へ、解るまい』

確かに解りません、最早議論もかうなつてはおしまひに候、實に何事も算數に限る！余も歸京の節は遠州灘邊にて舷に腰かけ數ナムバで△△式に出來上り居る大空の星を數へ、眞逆様に波の上に落ち『又落つちやつたあ』とでも叫ばむ哉。

さて中央氣象臺に於ける君が近頃の日課、詳しく承はるを得たれば余の昨今の日課をも申上けん、第一、晝寢、唯それ晝寢のみ、毎日ごろ／＼して居るだらうとの御推察はあたり、由つて余は晝寢の事をお知らせするが最も妙なりと信ず。

余もまさかに朝からは寝ねず。さなきだに靜かなる山家、晝飯を終ればこそりとも

せず、風通しよき奥の六疊を占領し、枕許に紀行、航海、探検類の雑書を積みて手あたり次第に讀む、むしろ眺める、心頭には一の煩慮なく身外には些の喧擾なし、唯直ぐ頭の上なる松林を渡る風の音の幽遠なる恰も絶海孤島の汀に繋がる浪の音を聞くが如きのみ。何時しか飄々たる我が魂も亦微茫煙浪の裡に消え行く、或時は一頭の駱駝ラクダに乗じて極目際なき曠原を横ぎり、無窮の路を辿りて、舊き昔の眠の國に運び去らる。然るに昨今は讀みし書籍に空想を煽られ過ぎて、眼さへ遂に寢はぐれしかば、獨り庭に下りて葡萄棚の下なる庭石に腰打ち掛け、青葉の光を仰いで茫然たる折しも、決して晝寢せし事なき弟の文二、眞直なる櫻の杖と小刀とを手にして裏門より入り來り、『兄さん之れがステツキになりましたようか。』

『なるとも。』余の葡萄棚を仰けるを見て、
『葡萄なら隣屋敷のがよく熟して居ます。摘みに行ましようか。』
『行かう。』

裏門を出て笹藪の間を通ずる小路を行けば間もなく隣屋敷なり。茲は三方丘に圍まれし小さき谷にて以前は井上といふ一家代々の住所なりしを、十餘年前此一家舉ぞり

て北海道に移住せし爲め遂に我家の有となりつ、今は唯屋敷跡のみ残り。曾て瓜や茄子の花咲きし此小さき谷も我家の人手足らぬ儘打ち棄てたれば何時しか野原同様となりては夏草生ひ繁り、小松さへ之れに雜りて中々に風情あり。流石に葡萄の古木はもとの儘に井戸の側に残り半地に委し半其蔓を昔なじみの老梅に托して紫の房ふさくと垂れたり。二人は互に二房三房能く熟したるを摘み、弟は程よき小蔭に陣取り葡萄を食ひつ、ステツキの細工を初めしが、狗頭いぬがしらを刻るとて器用に小刀を用ひ連りに苦心するさま、能き畫題なり。余は弟より二十歩許りを離れ、雜木の影涼しき草の上に身を横たへて甘き葡萄を口にしつ、靜かに四邊を眺め、折々弟の方を見遣り、又遠く天外を望みて崩れんとする雲の峰を見入りたり。

白雲一片悠悠々として漂ふとき、薄き影は森を越え丘を越えて來り、我小さき谷も暫くは光を失ひしが、雲の溶け去ると共に影も亦消え失せつ、人を酔はしむる様なる夏草の香は鼻をうてり、草や木や花や葉や野や丘や總て盛夏日中の光に酔ひ、眠り、溶け、而して満足せり。天の灝氣は地に下り地の精氣は天をつけり。

恍惚として之れに對する余も溶けんとす、嗚呼此時！昨日なく今日なく又明日な

し、唯此時即ち無窮なるを感じぬ。更に小蟬の吟聲の絶ゆるが如く絶えざるが如くして單調なるを聞けば、人をして日没を想像せしむる能はず。長きく此夏の日の此儘にしてをやみなく續くかと覺えし。

ふと弟の方を見れば彼は綠陰の涼しき影を全身に浴びて背の邊りは青葉を洩れし日影の斑點動搖せり。彼は一心を込めてステッキの細工をなすつ、一向に他を顧ざるなり。十二歳の少年！一日なほ五年十年の長きを覺ゆるは當に此時なるべし。かゝる時谷の西をかこめる丘の小路を『童も何時かは翁なり』と節面白く歌ひつ、姫小松の間を行く少年あり、弟は此聲を聞くとひとしくきつと彼方を見やり『翁も昔は童なり』と高らかに歌ひし様は、吾此處に在りとの相圖かと思はる。『太田！』弟は叫びて彼の少年を招きぬ。少年は頭を掉りて弟を招き太きステッキを差し上げたり。彼等の少年の仲間にステッキの流行ありと見ゆ。弟は余に頓着なく丘の方へと走り行けり。見よ、彼等は暫く互のステッキを誇示する様なりしが、忽ち相ならむで身に不相應なる棒を打ち振りつ、先の歌を聲合せて歌ひ、小松の間を彼方へと行くなり。彼の歌は小學校長が彼等の爲めに作りしといふ勸學の歌なりとか。弟の之れを歌ひつ、あらゆる

惡戯に日を暮すを余は見たり。童が翁になる、之れ彼等には全く無意味なり、否全く無感覺なり、見よ彼等は唯之れを節面白く歌ひ、其リズムに自己の樂しき魂をうかべて終日野山をかけまはるなり。余は彼等の姿を目送して『無窮の生命』其物を見るが如くを感じぬ。

之れはしたり、折角の晝寢の報告が又もや『無窮』の題目となり了りぬ。併し君、お互は實際の處最早おしまひに候、たとひ君は數の連續と△△式にて宇宙の廣さと生命とを測量するとも、余は詩の想にて力むとも、互に無窮々々とやかましく唱ふるに至つては、有窮の窮、窮の又窮たるに過ぎざる也。

死

此世を去りて冥界に下りし人の、『あゝ我曾て今日の死あるを思はざりき。』と叫ばむか。其聲のいかばかり悲かるべき。渠は生て屢々死のことを耳にし、死の事を見、これを語りて或は泣き或は笑ひたり。されど未だ曾ておのれ自から眞に死すべきを眞に感ずることなかりき。

戀の日記

一

彼の前には書が開かれてある。併し少しも書物は見てゐない。恐らく彼は自分が机の前に坐して居ることも忘れて居るであらう。顔は言ふに言はれぬ喜びを湛へて、身を壁に寄せかけて何とも言へぬ心持のよささうな笑を目元と口の邊に浮べて、のどかに、ゆるやかに巻煙草をくゆらして居る。

秋の日脚が西に傾いて窓から夕日がさし込んで居る。なまぬるい夕日が――。外面は折々車の音が高く響く、子供の笑聲が行きすぎる。風はそよとも吹かぬ、夕日を眞ともに受けた庭木の絶頂の小枝が時々頷いて居るばかり。

『あゝうれしかつた、何處らまで歸つたらう。』
彼は思ひつゞけた。

世には戀に悩んで苦しむものもある、死ぬる程の悲しい思をするものもある。そん

な悲しい心で見ると、静かな秋の夕陽ほど心細い者はない、遠い／＼昔の世の佛を面
のあたり見る様な心持がするものである。

彼も昨日はさうであつた。庭木の影がだん／＼長くなつて石段を一つ／＼と登つて
來るのを見ては夢心地になつて、身も魂も消え入る様に思つた。

すると、今日は待ち焦れてゐた少女が來て、何を話すともなく二時許を瞬間にうれ
しさに過して、之からは度々遇ふ事が出来る事に約束して、彼女はいそ／＼と歸つて
行つた。

二人の戀の底は涙である、しかし今はそれを彼も彼女も忘れて了つたのである。

夕日が次第に疊の上をはつて、投げ出した足から胸までを靜かに温めた時、彼は身
動きもし無いで身の溶けるのを待て居るらしい。

二

熱沙漠々のサハラを旅する人も折々は甘き泉涌く涼しき木蔭青きオーシスに出遇ひ
て死ぬばかりなる疲を休むる由あれど人生れ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一
度戀てふ眞清水を掬み得て暫時は永久の天を夢むと雖も、忽ち醒めて又其淋しき行程

に上らざるを得ず、斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出遇ふことなく、
たゞ空しく地平線下に沈みうせぬる彼の眞清水を懐ふのみ、果敢なきものならずや。』
斯て渠は深き歎息をつきぬ。

『戀の眞清水はいつも／＼涌きて流れ疲れし人を俟てども、たゞこれを番する少女の
みぞ幾度か／＼變りゆくなる。少女も一度は年若き旅人を伴ひて此泉に掬めど、いつ
しか其の手を泉にさし入れてこれを濁し、若者をこゝより追ひやりて、おのれも亦た
あへぎ／＼其跡を逐ひ、苦しき熱き淋しき旅路にのぼる。』

この時渠は遠方の空を眺め入りつ。

『われ曾て沙漠の悲劇と題する畫を見たりしが、一疋の猛き獅子と畏ろしけなる長蛇
と、茫茫限りなき沙漠の眞中にて苦闘する様を描けるものなり。これぞ此世の悲劇な
るかも。』

渠は戀を思ひ人の世を思ひ、少女を思ひ、沙漠を想ひ、オーシスを想ひ、想を聯ね來
りて深き悲へと沈み入りぬ。

『世の中がこんなに美しいものとは思はなかつた。』と近眼鏡の上に更に他の近眼鏡を掛けて渠は嬉れしげに叫んだ。

四

『スモーク』の一冊が机の上に置いてある。

今月今夜は十一月十一日の夜である。自分と彼女とが二年前の今月今夜は結婚した日である。

一昨夜は今井君と共に赤坂の或る料理屋で快く飲んで楽しく語つた、其夜今井君と別れて後、直に治子の家を訪うた。此日自分は治子の許へ心の緒琴一冊を送つた處、直ぐ送り返して來た、祖母の名を以て。自分はどんな苦しく、腹だ、しく悲しく思うたらう、醉にまかして不平をもらした。治子は泣いた。

昨夜治子から手紙が來た。あ、憐れの少女よ、彼女はわが小説を讀んで其身を千葉富子にひきくらべた。悲しい哀れな美しい手紙であつた。

自分は昨夜更けて、一昨夜治子の宅より歸つて後、午前二時半ごろまで起て居て作つた新體詩を書きあらためて、手紙を書き添へて、其れを今日午後一時頃治子の宅へ

持て行て『水沫集』の中に入れて密かに渡した。

治子は自分を見て絶えず涙ぐんで居た。

これが一昨日來の事柄のあらましである。若し詳しく書いたらなか／＼一章ではすむまい。實に色々の事が雜つて居る。

今井君が自分のために『スモーク』の第八章を語てイリナがリトイノフに送つた書狀を讀んだ時自分は涙が込みあけてきた。其の夜の酒がどんなに此の悲しい心に沁んだらう。其の夜の明月がどんなに此の悲しい心に映つたらう。

何事も神の御心にまかし奉る。自分は男らしく歩みたい。あ、實に男らしく。

自分の前途は未だ甚だ望が多い。文學者としても政治家としても自分は未だ實に此腕を十分にためした事がないのである。

日本の今日の詩界も政治界も少壯有爲の人物をまちにまつて居る。自分は此の生涯を仇に過ごしてはならない。

戀は實に悲しい。而し悲んで壊りたくない。此悲に堪へてこそ此の情は益々高く高く清くなる。

今日の曇天が、どんなに自分には悲しかつたらう。

自分はどうしても日曜は教會に行かなければ此命がもてない。自分は神なくしては生き難い事をつくづく感ずる。

戀の悲が破れたる時に友愛の光がどんなに強い力を以て、自分の胸に沁んだらう。信子の時も實にさうであつた。

あゝ戀よ。何時までも自分を苦しめ弄するぞ。

自分の作つた『おとづれ』が國民の友に出た。これが第二の小説である。世間は冷やかに迎ても宜しい。治子は書き送つた『此の「おとづれ」を読み玉ひし人多き中に初めの一字より終りの一字まで涙と共にくり返し／＼讀みたるは私一人ならん』と。

自分は満足である。悲しい満足を感ずる。實は北海道の少女にも讀ましたい。

たとひ治子が自分を此後、永久に忘れてしまつても、彼女はとても一度深く刻まれた深い戀の悲みの中にひそむ樂を忘れるわけにはゆかぬ。よろしい。利害得失のために、動き易いのは女の性である。傍人が勝手に製造し想像する利害論は勝を占めてもかまはない、人情は最後の勝利者である。

遠からず治子から何か手紙をよこすであらう。若しよこさなかつたら、それはイリナの手紙と同じ心であるに極つたのだ。自分はリトイノフ程には泣くまい。靜かに天の命を受ける許りである。却つて治子の心は絶え間なき苦惱に破れるであらう。

自分は今、『スモーク』の八章及び九章を讀み了つた。八章に於てリトイノフはイリナと別れ深き絶望に陥り、幾年の日月を経て九章に於て再會した。

自分の前に小さな十字架が置いてある、紫水晶で作つて有つて金具は金らしい。これは昨日治子が送つてくれたのである。治子の手紙にこれを私の心と想うてくれると書いてある。

治子は今日、自分の去つた後、祖母と共に叔父の處へ行つたとの事、今井氏が路であつたさうだ。自分は言ふに言はれぬ不安を感じて居る。丁度、イリナが舞踏會に望んだ後のリトイノフと同様な感がする。自分はしかし、リトイノフのタイアナを持って居ない。自分を愛した、少女は二人まで其の愛を破つてしまつた。治子は再び自分の愛に身を投じてきたが、何となく不安に思つて居る。

自分には殆んど今、光を見ない花の様な極めて淋しい感がする、自分は決して幸福

者ではない。

自分と治子との関係は如何したらよからう。決して戀の祕密は永く保たれるものではない。打ち明けて凡てを命に決し様か。あくまで祕密にして命のくるを待たうか。如何なる命がきても之れを甘受し様か。自分には今は決し兼ねる。

夜は大分更けた。汽笛の響が遠くで聞える。彼は（こゝには彼と書く）今更の様に都會の生活に氣付いた。實に妙な所だ。何のために自分は此處に生活するのであらう。何のためにこゝで今の様な生活をするのだらう。東京がなぜ自分にはいゝのだらうと渠は思ひつゞけた。

彼は叫んだ、『戀よ戀よ！ 戀ほど時間を浪費するものあらんや。戀の最中に居ては何事をなすにもものぐさく、心は何時もまどろみ、戀の破れし後は何事をなさんとの氣力すら碎けて心は痛み苦む。戀よ戀よ。願くは少女を選択して其の光をそゝけ。』と。

五

「戀とは何ぞや。」かゝる問を自から發し、戀といふ事實に深き思を凝らしつゝ、戀する

ものあり。渠の如きはその一人なり。

六

「戀の邪魔をせらるゝほど苦しい者はない、それも判然と異存でも言はれてゆく末の夢を破壊されるのなら、手術が亂暴なだけに或は痛苦が一時である、亦たその異議に向つて十二分の抵抗力も奮ひ起されて、此方の意地も我慢も元氣を出す、従つて張合があつて面白い事もあるが、それと違つて何とはなしに二人の中をせかれたり、それとなく悩まざるゝのは、二人に取つて之れほど苦しいものはない。いつも此の慘酷な仕うちを女の母がつとめるものである。戀はいつも母親が破るにきまつて居て、いつも又、その仕うちが女丈けに蛇の生殺と同じことである。自分の身の上からまづ一例を引いて見ようか。」と或る四十男が圓居の若い者を相手に話した。

若い者には何よりの御馳走である。皆んな此の哲學者の戀の身の上ばなしを珍らしさうに聞き込んだ。哲學者先生は頗るまじめに語り出した。

『そこで又、不思議な事は二人の仲だちをするものは何時でも大抵は母親にきまつて居るのさ。母が種を蒔て、芽をふかせて、それでやつと氣がつく、氣が付く事が則ち

戀のためには殆ど日光のやうなものである。二人は次第に氣をもみだす、それ丈け情が深くなる、泣く、行末をはかなむ、それだけ戀しさが増す。戀の日光は祕密の暗のうちでこそいよ／＼温かに照るものである。母親は此の様に氣が付いて愈々眞綿を二人の首にまきつける。二人は苦しさに益々だきしめる。母親が無理に離した時は、生木を割くといふ比喩が最もよく穿つて居て、双方が枯れてしまふか、さなくば片輪者になつてしまふ。さうなると父親は流石に男だけとても離れ難いものと見て取つたらふいと氣をかへて二人の望みにまかせてしまつて、寧ろ二人が一ツになつた行末をかれこれと氣をつけて無事の發達と立派な實の成る日を待つことにする。母ばかりの娘と戀仲になつた若いものほど氣の毒なものはない。君だちも之れは氣を付け玉へ。僕の例もそれさ。』

と哲學者先生は言ひかけて一寸眼をそらして天井の隅を見た、昔の事を思ひだして其冷い血の何處にかまだぬくもりが残つて居るらしく、暫く無言であつた。

』と言つた所が、僕のは實はそれほどの事でもないのさ。娘と言ふはその時二十三であつた。僕は二十八であつた。娘も僕も決して初戀ではないので。僕は一度死ぬほどの

目にあつた後の事であるから、もうさまでは熱しなかつた。しかしその娘が自分のみに焦がれる様のいかにも烈しいので遂には僕も心を動かしてしまつたのみならず、或晩、娘が身の上の恥を白狀して泣いてからは急に憐れになつて、自分の俠氣がむらむらと起きてきて、此娘の行末をおれの愛で守つてやらうと言ふ氣になつた。さうすると自分も可愛さといぢらしさとが増してきて、自分の以前の戀とは少し心持の違ふ一種の愛着の念が自分の沈んだ血をかき亂して來た。

『そこで母親は二人をどうしただらう。變に邪魔をした。自分は變にといふ外に今でも母の仕打を形容する事が出来ない。

自分は母親の邪魔を何と感じただらう。そこで少し僕は僕のこの頃の人物を説明する必要がある。』

『自分は自分で其頃常時いづつも思つて居た。到底自分の如き人物は普通の母親に知られる筈はないと。なぜならば自分は丸で、普通の青年と其趣きを異にして居るからで、つまり詩や哲學や宗教の領地に籍を置いて居て、人生の事を問題にして居た、たゞそれを學問の机の上に乗せて置くのではなく、僕の感情といふものが丸で躍つて熱して或

は狂つて此問題に左右さるゝから、「立身」とか「出世」とかいふ標語は餘り自分の耳には勇ましく聞えなかつた。普通の母親が、どうしてそんな若い男を好まうぞ。氏無うして玉の輿に乗るといふが母親の娘に對する夢想である。「玉の輿」自分のやうな人間は冷笑したくなる。卑しみたくなる。その様子が自分の舉動に出る、母親は益々自分をいやがる。

自分は初戀の時も此流で母親の反對をうけたが其時は、自分も丸で戀の狂人であつたから、猛然として母親と戰つた。そして勝つた。そして遂にまけた。』

『さて此度は最早やかゝる熱は起らない。自分はどこまでも冷笑したくなつた。母親がいやなら、おれも此戀はごめんだ、氣の毒ながらお前の娘は捨て、やる。そのかはり、娘の心がそのために死んでしまつても知らないぞ。と言ふ氣になつて來た。』

『しかし娘はどこまでも自分にこがれ、自分を信じ、自分を命ともして居た。それは實をいふと娘は以前、身に……有るとは云ふもの、戀といふ戀は自分に向つて初めて起つたので、二十三にもなつてからの初戀であるから、丸で夢中なのである。又た二十三とはいふもの、末子であるから心持が何處かに幼ない所がある丈けいぢらし

い程、自分にこがれてしまつた。どうして自分に此娘が捨てられやう。そこで自分は初戀の時、狂氣のさまで母親と戰つた心持とは一種違つた反抗の念を起した。』

『すべて此等の念が日々、三人の間の極めて微細の出來事の上にもほのめいて、笑ひつ語りつ、何んでもない中にをり／＼三人をなやまして居た。尤も苦んだのは娘である。それを見る自分は又たそれ丈け心をなやました。』

孤立の悲惨

人間が自己の動物界にある事を忘れ、自己を禽獸以外に置くことによりて生ずる誤解の最も大なる一を、人間互に、其の思想感情を十二分に交換し得ると信ずる事である。然り彼等は明かに斯く信じない。されど實際に於いて斯く信ずるかの如くふるまふ。而して其結果は人間の種々の失敗悲惨の原因となる。禽獸に言葉がない。彼等は互に其の思想を交換する事の手段を最も缺いて居る。草木は更に缺いて居る。然して人間と雖も、亦其實は大に此手段を缺いて居るべき筈である。人間の不完全なることの一は實に此の手段の缺乏である。

あゝ、孤立よ、而して人間は社會を成して居る。人の孤立的分子と、社會的分子とは未だ一致して居ない。人間は孤立して而して團居して居る。彼等は他の到底解し能はざる者を其胸底に藏しつゝ、互に交際して居る。言葉を換へて言へば、人間は他に示すこと能力を有せざるものを懐きつゝ、他と交際して居る。あゝ、悲惨よ。世間多くの悲

慘が、此缺點から來り、又た人間が此缺點を自覺せざるより來ることが更に多い。

人は今猶ほペルの高塔を建つる時、其言語の不通を來せしと大差なき時代に在ること知らざる也。

わが過去

彼は夜更けて獨り燈火に對し、默想すること多時、

彼が心は靜かなる事、山間一碧の湖の如し。

彼は思へらく、「わが過去は熱情と理想と私慾との戦なりき。われは多く思ひ、多く感じたり。されど多くの勤勞を執らざりき。わが過去をわが經驗としてのみ視れば、實に價ある經驗と言はざる可からず、されど若し理性の示す所に照さんか、怠慢放逸の生活と言はざる可からず。」と。

されど彼は尙ほ自ら言はんと欲して言ふ能はざる者を、其過去の經驗中に感ぜり。彼は其の過去の生活をよろこぶの情と悔ゆるの情との半々を感じぬ。

而も確として思へらく、「我か過去は過去として價あるものたらしめよ。されど斷じて將來に於て斯る怠惰なる生活を許す可からず、若し我尙ほ斯る放逸なる生活を送りて改むる能はざらんか、我生涯は失敗なるべし、自殺なるべし。」と。

彼は又た思へらく、「我は勞働勤勉の樂を知らざる乎」と。

若し人を二種に分てば、其手近にあることを爲して着々其歩を進め行く人と、常に鼻頭はなびきを去る幾尺の空間に或者を描きいだし、之れに被らしむるに黄金色の光澤を以てしてこれを望見して拱手自ら樂しむ人との二種なりとす。渠の如きは其の何れに屬すべき人乎。

趣味について

人の妻たり母たる人の責任の重なる者は家庭内の趣味として高潔温健和中ならしむるにあり。

人として趣味なきはなし、たゞ悪趣味たると好趣味たるとの差あるのみ。

『嗜好』と『趣味』とは混合すべからず。嗜好とは其人の樂みなり、趣味とは其人の道義的慾望なり。

例せば勞作の如き、これを若痛と思ふ者には苦痛なるに相違なし。若し人ありて、此苦痛を忍んで勞作に従事するとせよ、忍耐の徳は彼れにあり、されど以て彼れが感ずる苦痛の分量を減じたるには非ざる也。又た人あり、其勞作して成就する所の作物に對し深き興を覺えて、其勞作の苦を忘れりとせよ。斯る興味は彼の求めに應じて如何なる場合にも彼を亢奮さすべく生すべきか、斯る興味は彼の欲するまゝに永續すべきか。今日までの美術家は皆なこれを否定せり、果して然らんには、興味は勞作の苦痛

を或時の間忘却せしむるの力はあれど、其人の勞作其物に對する苦痛は消し得ざるなり。此時に當り彼の農夫等が習慣の力を藉りて勞作の苦痛を感ぜざるが如き、前の二者に比すれば其幸の大なる決して同日の談に非ざる也。されど若し茲に此等三者が勞作者に就て深き趣味を感得せりと假定せば如何。勞作の苦をする實に消極的なりし者が却つて勞作の樂を覺ゆる當に積極的となるべき也。

趣味の教育の人生に如何ばかり大切なるかはこゝの事なり。若し教師ありて其子弟に教ふるに勞作の報酬の如何に大なるを以てせば如何、これ結果の大なるを示して勞作の苦を忍ぶ事の甚だ小なるを教ふるなり、これ亦可なり、されど更に進んで勞作者の如何に尊きなるかを教へ、これに對する趣味を鼓吹すると孰れぞ。

しからば如何にして勞作の趣味を子弟に吹込むべきか、此問題を提起して遍ぬく思起するは佛の巨匠ミレーが暮鐘の畫なり。夕暮の雲の色の金色なる、マベアリヤの鐘の音の響きそめたるかと思はる、寺院の高塔の遠林を出でたる、兩個の農夫彼等は夫妻なり。今しも一日の勞作を了りて、さて漸々歸路に就かんとする時靜かに野づらを渡りて響くはマリヤの鐘の音なり。二人はこれを聞て相對して首を低れ、慈愛の天火

に向つて祈念をさへけつゝあり。これ實に大なる意味を含める名畫に非ざるや。教師
若し此圖をかへけて子弟に對して告ぐるに勞作の事を以てせば如何。

青 桐

予が窓外に一本の青桐あり、春の終りより、夏の終りに至る間の予の無二の愛友なり。朝光始めて明かなる時夕陽最後の光を投ぐる時、細雨蕭々の時、炎天風なき時、其色、其光、其音、實に予が無二の愛友にてありき。さるを秋風至りて予の身に様々の心配を送ると共に此愛友の身の上は尤も悲哀の有様に立至りぬ。嗚呼熱愛に堪へたる夏の日は去りて搖落の時節は徐々に襲ひ來る。悲哉。

憐れなる兒

一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と收二とあり、互に四方山の噂に笑聲相續ぐ。最も樂しき晩なりしなり。

佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身の上も亦た話の種となる。其不潔なること語られ、而して又其愚鈍なる事語られ互に哀れがりぬ。暫時にして主人の翁吾に向つて言はるゝ様、さて先生吾家にも亦た一個の愚者あり、已に御存じの如し。其愚かなる事譬へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか、殆んど當惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾此語を聞き、直ちに翁の心を知り、半ば領づき半ば笑うて、實は甚だ挨拶に困りぬ。然り御宅には馬鹿者ひとり御座りますとも言ひ難ければなり。

馬鹿者とは誰ぞ、愚者とは誰の事ぞ。可憐兒なり。

吾等兄弟はじめて此家に移るや、直ちに一個の小兒を見たり。年の頃十か十一なる

可し。

これ坂本氏の子に非ず、坂本老人に妹あり、嫁して他に出づ。此子は則ち其孤兒の一人なり。母と一人の姉と共に、今は坂本氏に寄食の哀れなる身の上となりし也。

寡婦は已に五十の坂も越えたらん如く老ゆ。一見して其愚直なる、甚だ氣の毒なる人物なることを知らるべし。坂本家が如何に寡婦に取りて實家なりといへ、兄の主人に對し、殊に意地悪からざるに非ざる家婦に對して、常に甚だ氣兼して住める様子は、新參の吾等が眼にも、容易に看取せられたり。寡婦のみにあらず、此苦しき忍耐は其娘も亦分前せり。十八九の少女の優しき心情も此浮世の悲しき運命の爲にや、何となく已に畏縮けて見えたり。

聞け。綿繰る音の聞ゆなり。此れ彼の猶ほ稚き孤兒が、強ひられて採る夜なべの仕事する也。不思議なるは此小兒が學校にも通はざる事なり。吾等兄弟始めより是れを疑ひぬ。

孤兒、學校に通はず、朝起くる毎に命ぜられて爲す事は、家の周圍の掃除なり。朝な／＼小さき箒もて庭先をチュ／＼と掃く。如何にも哀れに見ゆ。晝間は何事をなし

て日を送るか、吾未だよく知らずと雖も、僅に見たる所によれば、只うろ／＼と庭の内、家の内などうろつき居るもの、如し。時々家婦などより仕事命ぜられて爲す、其度毎に常に叱咤せらる、聲屢々吾等が耳に入りぬ。夜は多く綿繰を務め、十時を定めの時となし、鐘鳴るや、大に喜びて、夜具に駆け込むが如し。吾等暫時にして此小兒の決して世の常の者ならぬを知りたり。此舉動、其言語、凡て遲鈍にして少しも少年の快氣なし。笑へども未だ近隣を驚かす如くに轉けて笑はざるなり。泣く時は僅かに悲鳴するのみ。吾が井戸先きに顔洗ふ毎に他より注意を受けて頭を垂れ一禮すれども、注意を受けぬ時は決して禮を爲さず。吾が顔を打ち守りて眼をしばた、くのみ、微笑もせず、恥かしがりもせず。吾已に尋常ならぬを知りたりしなり。

哀れむ可し、此孤兒實に愚かなる子ならんとは。寡婦が心中果して如何ぞ、眞に哀れなる親子にてあるなり。

坂本の老人、語を續け吾に語るに次の事を以てす。

此可憐兒の上に兄あり、これ又愚にして殆んど處置に窮す。終に或る寺院に送る、寺院其教へ難きを申し暫時にして送り還しぬ。然るに今は養艱寺に在りて小僧となり、

已に經文數卷習ひ得てや、元に勝るに至りたり。其上に猶ほ一兄ありき。此人は普通の兒なりき、されど不幸短命、今は在らず。

可憐兒さきに通學せしなり。されど他の小兒と共に學ぶ能はず、愚かにして何事も學ぶ能はず、終に止めぬ。爾來家にあり、何を教ふるも少しも學ぶ事出來ず。強ひて學ばしむれば泣き出すのみ。若し他の小兒より打たる、時は平然として受け、忍び難きに至れば自ら又自分の頭を打ちて泣くに至る、若し叱責せられ甚だしきに及べば、己れ自ら己の手の甲を嚙んで悲鳴す。實に憐れむべき生れつきなり、或は言ふ、猶ほ甚だ稚けなき時高所より人知れず墜落して氣を失ひたるに非ざる乎と。老人眞面目に此『或は言ふ』を語れども、吾は之を信ぜず。原因は他にあるべしと思ひたり。

此事情を語り終りて老人又あらためて言ひぬ。今や殆んど處置の法を知らず、恐る、此兒終に普通の成長を遂ぐる能はず、終生獨立の生活を保つ能はず、愚に育ち愚に終る可きかを恐る。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾老人の心を察して甚だ氣の毒に思へども、實は甚だ答へに困りぬ。然れども亦自ら思ひぬ。此兒、愚は勿論相違なきも、自から見たる處、老人より聞きたる處、處々

の點より之を伺ふに、何となく全くの愚者にもあらぬ様に思はれ、一種の原因あるありて心性發達を壓せらるゝにあらざるか、若し能く之を導き心性本來の微なる處より藥を投するならば或は意外の變化起らざるべきか。吾かく思ひ、遂に試みに自分指導の任に當りて見んことを諾しぬ。

二十六日の夜は則ち日曜日の夜、吾可憐兒の教育を承諾したる夜なり。而して今は二十九日なり、二十七、二十八、及び今日と此三日を可憐兒に於ける觀察を略記すべし。

二十七日、寡婦なる可憐兒の母、事ありて二階に上りたる時、兒の教育を半ば恥ぢ半ば喜びて頼みぬ。吾只何事をも言はず、宜しう御座いますとのみ答へ置きたり。

此朝吾顔洗つて歸る時、可憐兒已に庭先に例の如く箒と塵箕こみちりとを携へて立ちぬ。吾を見て例の如く默然として只だ瞬きせり。其時何事が問答したれども忘れたり。手に携ふる所の齒磨粉のふりきくわんを示して其開閉あけしの法を問ふ、しきりに眺め、手に取りてつまぐり居たれども終に開く能はず、吾之を教へぬ。兒見て笑へり。朝まだき散

歩せんとて二階を下れば、兒猶ほ庭先にありて箒を弄び居たり。強ひて伴ひ行かんとすれども叱らるゝと稱して來らず。掃かぬ時に叱らると稱し、吾等が捕へたる手を振りきつて歸らんとす。收二内に入り許可を得て來るを見て、始めて安んじて吾等と共に歩む。

此朝大に霜ふり田園眞白なり。吾指して問ふ、彼の白き者何ぞや。雪なりと答ふ、否霜なりと教ふれども雪なりと稱して承知せず。高等小學校の門前に伴ひ其石階を踏み登りて階数を答へしむ。一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツと數へて登りぬ。吾問うて曰く幾段なりしや。十二なりと答へて平然たり。否八ツにあらずや。自ら八ツと數へ乍ら十二と言ふは可笑しといへども、彼少しも通ぜず。教へて曰く、高等小學校の石階は八ツなり、記憶せよ。と彼しばらくは八ツと答へて記憶したる如くなりしも、幾何もあらず問へば已に忘れりぬ。

此日午後と記憶す。二階に登り來る。余が前に坐し、默然として小さき手を疊につけ、茶色の頭髮をや、長く生したる頭をいと恭しく手の甲の上に置きぬ。而して平然として坐し默然と吾を眺め、口と眼とを妙に動かす。

以上の記は已に二十日前に記したる者に屬す。以來吾筆を投じて復書かざりしと雖も可憐兒は依然として可憐兒なり、然り彼は其不運なる天稟と其不幸なる境遇との爲に益可憐の者となりつゝあるなり。彼が悲鳴する聲、今二階の下に聞かる。嗚呼彼は何事を泣くぞ。

吾が土曜日の夜

土曜日の夕暮は來りぬ。連日蕭々と降りつゞける春さめ、此日猶ほ晴れやらず、やまゝに漲る水蒸氣のかなたより、濕めやかに黄昏來りぬ。

小説『うきよの波』を読み了りて、暫時頭をかゝへ眼を閉ぢて哀想に耽り居たる余は、室内の暗くなりしにも氣付かざりしが、弟なる人、入り來りて、燈つけまるらせんと言へりしに驚き、振り返りみれば、幽闇、寂寥の氣何時の間にか我が書齋に充ち居たりけり。

『さて今日も亦た暮れしよ。否、吾自から點けん。』
『左様か。』と答へて弟は直ちに出でゆきぬ。

されど余は猶ほ燈つけんとせせず、がらす越しに、そともの暮れゆく空に眼を放ちぬ。外面は流石に猶ほいと明るかりき。

『あゝ今日も暮れるか。』余は再びつぶやきぬ。

かくて『うきよの波』中の一句を何心なく口のうちに繰返したる時、吾が心悲しき思にみたされぬ。見やるかなたの峰の上を濃き雲の一團、闇と雨とをつゝみて、飄々と掠めゆく様ものすごし。又た寂しくも哀れにも見ゆ。

『いかなれば此句は我に斯く迄の哀れを催さす事ぞ。』——おん僧、酒は年経たる匈牙利酒なり。嗚呼只だ此の句——さても氣の毒なるはエ、リヒよ。恐ろしきは、うきよの波にぞある。』

立ちて障子開き、欄干に凭りて、ひたすらに暮れゆく寂しき風物に眺め入りぬ。戸數四五百に足り足らぬ小市街を見下ろして遙かに、太平洋に續く日向灘を背おひて聳ゆる元越山に向ひたるは吾が書齋なり。

絲の如く降りそゞ雨に、薄青き煙をこめて、重く市街を覆ふものはなにぞ。

『夕暮の影か、寂寞そのものか、哀思そのものか、そも又た平和と安眠と情話と戀歌とを和らぐる春の雨の魂か。』など思ひつゞく。

『さても浮世の波のおそろしさよ。』吾が思は再びエ、リヒの身の上の如何にも哀れなる物語のうちに入りぬ。筋太き手を、をりく獵刀のつかにかくる癖ある二十三歳の

若もの、「朝あまり早く出さぬやうにひかふる妻迎へむとはせずや」とセバルト和尚にいはれて顔赤めたる彼、其の黒き瞳の稻妻のやうなる光、もしも屋根の上をわたる淋しき風の音を聞きながら、離れたる浮世の夢の幻を描きつゝある彼。さながら生けるが如く吾が佛に立ちけり。

『さて哀れのものよ』余はつぶやきぬ。一滴の涙をのみぬ。

時に『清正公様』の信徒たちが打つ太鼓の音、雨に濕めりて重く響き來り、名を知らぬ小鳥、門前の柳の絶頂にとまりて、雨と夕とを嬉れしげに聲をたて、囀り、二羽の、これもわが知らぬ鳥もつるゝ様に並びて、上に下に飛びて山のかげにかくれ去り、暫時して柳なる鳥も何れにか去り、太鼓の音のみぞ愈々重けに響きける。市街寂として人なきが如し。水田になく蛙遠く又た近し。

忽ち思ひ起せば舊き友の身の上なり。忽ち思ひ起せるは、阿蘇山の美しき煙なり。忽ち思ひ起せるは、小兒の時に嬉しかりし事悲しかりし事なり。或ははてしなき時代のすゑく、或は限り知れたる吾身、命の行末。彼れより此れ、これより彼れ、吾が思ひは靜かに、而もあとさきなき輪の如くめぐり／＼て、夕暮の寂しきうちに又た言

はれぬ樂しき心地を織り出し初めぬ。

はからず或る旅館の一室に出遇ひ、不思議にも十年心交の交りの如く語り合ひたる人の、一夜をかぎりに西と東とに別れて其のまゝ、互に音さたなくなりし事など想ひ起したる時は、ひたすら人間の逢別遇離の怪しき縁と、はかなき命運など思ひ續けぬ。

『大野太一、大野太一、嗚呼此人今如何になりしか、此人今何處にあるか。』

十一の昔に別れて、其後はたえて一度び相違はざる、十三歳の時の同齡の同窓の友の事、突然吾が哀想の環の一端に現はれ來りぬ。

『彼れ將た、浮世の波にあらはれしか。』

『大島は彼の故郷なり、此島は布哇出稼の盛なる土地なるを思へば、若しや彼れ群島の一はしに他の同胞と圓座して故郷戀しき歌唱ひ居らすとも言ひ難し。』

『左る事もあるざるべし。』

『然らば愈々うきよの波に浮沈して、今はいと淺ましき有様にもがきつゝあるか。』

『何ぞ知らん、曾て彼の優しかりし紅の頬は、今は日にやけて薄黒く染まり、彼の丸く太りて柔かなりし手は、骨太き逞ましき腕と變り、家には二十に足らぬ若き妻に、

夕餉の煙を藁屋の頂より吐かせて、それを谷の陰より眺めつゝ、新月の光ふみて歸り來る若き農夫と生ひ立ちしやも。』

『嗚呼大野太一！』余は突然靜かに呼びけり。更に思ひつゝけぬ。

『何故吾は彼の時、返書のはがきなりとも出さざりしか——何故又た、此友のみが小兒時代の舊友の中にも、特別に想ひ出す事のしばくくなるか、想ひ起す毎に愛慕の情と懷舊の情とに充たさるゝか。』

『それはかれの品性の美しかりしが故とぞ知らる。』

かくて吾が佛のうちに一個の愛らしき少年立ちぬ。顔にあふるゝ無邪氣なる微笑のうちには誠にやさしき友愛の情をあらはす事、昔ながらの彼のまことの佛なり。さて愈々明らかに此佛を描かんと試みければ、十一年の記憶は已に朧ろにかすみて更らに確かなる畫線を與へず、徒らに描かんとつとめて益々朧ろのうちに消えゆくのみなりき。却つて吾が想像しける彼は二十三四の屈強の若者とあらはれ、新月の光の下に、蹠を擔いで立ちけり。されど不思議にも彼の顔には無限の悲を包み居たりき。而して何となくエ、リヒと相似たる様に思はれたり。

『さなり、さなり、エ、リヒの幼時は太一の如くなりしならん、太一の如く、美しく、優しく、親切に、又かしく。』

『然らば大野太一の今の命運は又エ、リヒの如くなるかも。あゝ、うきよの波に洗はれしか。』

此時余は一首の古歌を想ひ出し、低き聲にてゆるやかに口ずさみぬ。

せきとむる柵しがらみぞなき涙川

如何に流る、浮身なるらん

二度三度此の歌をくり返して吟じぬ。おのれの聲の調子の悠々哀々の波にのせられて吾心も更に悲しくなりぬ。此時又エ、リヒを思ひ、而して大野太一を懐ひ、而して又た此歌を吟じけり。

頭を擧ぐれば、夜色已に全く市街、山野、田園を包みて、雨のみぞ愈々降りそゞぎ、水田の水薄くひかり、暗黒のうちに又た、寺院の後ろに白壁おぼろにすかされ、耳をそばたて、聽けば雨の音にまじりて老松の並木の馬場の方より遠瀬の如き響かすかに聞え、更に耳をすませば、何處よりか小兒の泣く聲、聞えつ絶えつす。提燈一つ小路

を横ぎりて忽ち又やみのうちにかくれぬ。

『嗚呼今日も愈暮れたるか。』

余は内に入り燈あかりをつけ、机に向ひて靜かに紙をのべ、京なる友に書狀認め了り、更に父母のもとに一通認め、又近來打たえて音づれなき友にも一通を書き、和歌など書きそへぬ。

かくて夜の十時を過ぐる半。かくして吾が土曜日は過ぎぬ。

我が過去

我が過去は空想と罪惡と悲慘と失敗となりき。

クリストの教、其眞理、其生命を奉じて以來、己に數年を経過せり。此數年間は我が一生に取りて尤も謹慎を要すべきの歲月なりき。丁年上り二十五歳。而して我は此間に處して殆んど夢見る如き生命を送りぬ。クリスト教の眞理は我が精神の上に何の指導する所もなくして過ぎたり。

如何に屢々神を呼び、神に祈禱したるぞ。如何に多く泣き、多く悶き、多く狂ひたるぞ。カーライルを讀みたるは二十歳の夏なりき。これぞ吾が狂熱の發端なりける。されどカーライル以前に於て我は實に盲目の弊なりしなり。

丁年の徴兵検査を期として學生の早稻田を去り、獨學の麻郷に入りて以來、其一年間の月日を我は如何に經過したるぞ。一個の狂兒、一個の夢の兒ならざりしか。此の時は我已にクリスト教の信徒の一人なりき。されど麻郷に在りて我果して信徒の嚴

格なる體面と品行と善事とを完うしたるか。麻郷に於ける、此我、果して眞面目のものありしか。一言す、否。一個狂熱のものに過ぎざりし也。

山と海と川と林と戀と、我が所有は之れなりし、箕山、高塔、千峰、岩城、琴石の諸山、麻里布の海、岸之下の海、八海川、麻郷村を暗く隠す松林、而して彼女と彼女と彼女と彼女。之れ即ち彼地に於ける我一年なり。

過去の我が生涯は、基督信徒として恥かしからぬ者なりしか。如何なる點が、果して基督信徒らしかりしぞ。

第一、謙遜なりしか。太だ然らず、我は神の前に於ても、人の前に於ても、最も高慢なる者なりき。常に力足らざる企圖にその野心を焦したりき。神に捧ぐる事業の企圖を思はずして、世を驚かして自己の名を挙げ、利を占めんと欲望を充たす事に急なりき。神の前の謙遜なる者、いかで此の如きの行あらんや。若し我が過去の生涯に於て謙遜ならざりし實例を一々指摘し來れば殆んど「高慢」其れ自身は我なりしと言ふを得可し。何故に我は斯く高慢なりしや。其理由は明白なり、曰く全能なる父の神を愛し、之れに近づき奉り、以て赤兒の如く無我なる者となる能はざりしが故なり。

第二、自尊ありしか、否、我は神の前に高慢なりしが故に却つて人の前には卑屈なりき。心霊の高貴を神の御前に確持する能はずして多く人に媚びんことを欲したり。我は信ず、基督信徒には神の愛と義とのみに由りて世に立つ、偉大なる自尊の念なかる可からず。之れ謙遜の徳と撞著するが如くなれど、然らず。高慢は主我なり。自尊は神と我との聖なる關係を尊び、世の前に屈せしめざることなり。言ひ換ふれば、我が心霊をして我慾望の前に屈せしめざることなり。而して過去の我が生涯に於て最も缺く所ありしは此自尊なりき。故に我は餘りに多く人の盡力と好意とに依頼したり。嗚呼何ぞ夫れ卑屈の甚だしき。斯くの如くして我が心霊の光を暗くし、我が品性を壞りたり。我は神と偕に在りてふ信仰足らずして徒らに先輩の同情に訴へたり。嗚呼先輩何物ぞや。神の御前に於ては凡て同等ならずや。我は大なる神よりも小なる人を頼みて此高貴なる人生を歩まんとしたるなり。其は何故ぞ。理由は明白なり、曰く父なる神の愛を信じ、ひたすらに之れを信じ以て我が困難に當らざりしが故なり。曰く、我が心霊の高貴を自覺することの薄ければなり。

第三、品行嚴正なりしか。曰く、否。我は惡てふ惡を行はざりき。されど我には嚴

正なる品行なかりしなり。我は放縱なりき。基督教信者としては如何に亂行多かりしよ。これ何故ぞ。父なる神の義を實踐する事を以て、神を愛する所以たることを確守する能はざりしが故なり。

第四、勤勉なりしか。曰く、否。我は思ふ、基督教徒は最も勤勉ならざるべからずと。基督は人にあくせくたれと教へざりき。されど決して怠慢なれとも獎勵めざる也。神の義を行はんと欲せば日夜の勤勉を樂みて執り、以て自己を神の用に供へざる可からざる也。されど我過去は空想するに多くして勤勉するに少なかりき。

第五、常に祈禱せしか。曰く、否。我は祈らざるなり。密室の祈り、我にあることなし。我が苦悶する毎に、神に訴へざるに非ず、されど常に神に祈ることをせざりき。常に祈らず、故に、常に神に近かず。

第六、自由、平和なりしか。甚だ稀なり。我は決して不自由の兒ならざりき、されど我が自由は、神の宮にありてふ、幽玄にして快活なる信念より來る、眞面目なる自由にはあらず。名利の一念、常に此世界を狭くし、此の心霊を亂し、自由と平和と享有し得たる事、如何に少なかりしよ、失望も放棄も皆之れより生じたり。

第七、忍耐なりしか。甚だ然らず。我が過去の生涯に最も缺けたるものは忍耐なり。我は黙して艱難に忍ぶこと能はざりき。靜かに洗煉に耐ふる事も力めざりき。凡て神の御心にまかし、深く自己に省み、祈禱と謙遜とに由りて、困難に耐ふる事もせざりき。叫びたり、悶きたり、咀ひたり、恨みたり、くじけたり。熱病患者の如くなりし。信仰堅實なる基督の信徒の如くならざりき。

第八、愛の心深かりしか。我は殘忍なる性に非ず。我父母は天性の善人にて在すなり。殊に我母は同情深きこと、普通の婦人以上なり。故に我も亦た同情の念、決して薄き方にあらずと自ら信ず。されど愛に廣大なる意義あり。同情は愛の心髓なれども、愛そのものには非ず。愛は没我なり。愛は道念なり。愛は實行なり。而して我が過去は極めて我儘なるものなりき。父母に對し、朋友に對し、妻に對し、弟に對し、同情の涙、幾度かそ、ぎたれども、嚴正なる愛の道を実行する事に於て甚だ乏しかりき。父母には我、不孝の子なりき。弟には我忠實を缺きたり。妻には溺れたり。朋友には薄かりき。教會を愛し、同胞を愛するよりも多く己れを愛したり。否否、己れを愛することだにもせざりき。自愛の高貴なる意義は神と人とを愛することなり。されど我

慾是れ主たる時に於て、眼中神なく、父母、朋友なし。

第九、基督を學ぶことをつとめしや。大に否。我が眼中、基督なし。基督の如何なるものなるか、我れ曾て究むることだにせざりき。基督無き神を望みたり。已に基督なし。何ぞ基督を學ぶことをせんや。

第十、聖書を研究したるか。否、否、我は聖書を一回だも通讀せざる也。聖書は我に何の力もなし。何ぞ研究といはんや。

嗚呼、基督なく聖書なく祈禱なきの基督教信徒。高慢、卑屈、亂行、怠慢、薄弱、我儘の信徒。我は決して基督教信徒にあらざるなり。

然らば過去の我は何者なりしぞ。曰く空想の兒なりき。

A BLIND DREAMER! 夢想の兒なりき。自由を夢み、自然を夢み、神祕を夢み、美妙を夢み、功業を夢み、詩人を夢み、戀愛を夢み、而して絶望を得たり。

麻郷に於て、柳井に於て、佐伯に於て、艦中に於て、北海道に於て、逗子に於て、東京に於て、カーライルを夢み、ウォールズウォースを夢み、バーンスを夢み、パイロンを夢み、今又西京に於て基督教信徒を夢まんとす。

夢想と基督教とは片時も兩立せざる也。基督教は人生の眞面目なることを教ふるもの。實行と苦闘とは「眞面目」の保證なり。夢想の妻は怠慢と安逸なり。誇張と浮薄とは其が媒^そ妁人なり、虚榮は其獨り兒なり。

潔の半生

潔は當時二十三歳の壯年男子なり。父は官吏となりて東京に留り潔は四歳の時、母と俱に佐伯を出で父の膝下に往き、遂に今日まで全く都に育てられしなり。十三の時父に従うて或地方に住みしも其間は三年に足らざりき、三年に足らざりしも、此田舎の生活は彼に取りては限りなき幸とはなりぬ。

潔は不幸にして十八歳の時、父を失ひ、其翌年母も亦孤兒を遺して逝きぬ。兩親を失うて後潔は全く孤立となりぬ。

潔の祖母あり。留まりて佐伯にあり。東京に來り住むを嫌ひて獨り、城山の麓に、其舊宅を守り、一人の女を使うて餘命を樂み居たり。

潔が身うちと言へば只だ此祖母あるのみ。東都には勿論一人と半身の血族あるなし。佐伯にも近き親族あらず、尺間山の麓、床木の村に三木と呼ぶ中農の一族は今日まで最も親しく交はりし親族のたゞ一なりしなり。祖母を除きては實に此の一族のみぞ彼

の親族と言へば親族なりしなり。

潔はあまり學校の教育を受けざりき、只だ三年中學校に學び一年半大學に通ひしのみ。佐伯に移住することを決せし一年前、已に獨窓の下、二三の友を除きては甚だしく世より絶ち、獨り何事をか學びぬ。

祖母は其餘命を送る丈けの資ありて潔の父母の死後と雖も、差支なかりしなり。

潔の父母は勤儉なりしかば、死後潔に相應の資をのこしぬ、潔全く自ら口を糊するに及ばざりき。之れ事實なり。

潔の天性は如何、これは茲に説かず、余が物語の進むに連れて自から現れ來らん。されど一言すべし、彼は猛烈なり。情も強く意も亦強かり。

三、四年滞在の積りにて佐伯に歸りぬ。一つには祖母しきりに其同住を望みしと一つには生地の懐かしさに堪へざるとなりしなり。されど其重なる理由は、他に在り。彼は暫く田舎にありて靜かに其學を續けんと思ひしなり。

已にこれまで、佐伯と言ふ地名は潔が一種の想像に畫かれしなり。彼は四歳まで佐伯に在りとはいへ、全く忘れてしまひぬ。故に只だ父母より、時々噂を聞きしのみ、

聞く度毎に懐かしく思ひ葉ほり根ほり聞き尋ねぬ。彼には已に一個の佐伯の山河出來て居たるなり。

母は屢々故郷の事を語りぬ。城山、番匠川等の名は潔が耳に甚だしばく繰り返されぬ。母は折りく今一度故郷に歸りたき由かこちしも、小さき官吏なりしかば女使ふ事もかなはず、さりとして世話してくる、留守居もなく、かれこれ言ふうちに逝きぬ。潔の心には此事甚だこたへ、益々佐伯に歸りて見たきの思を起せし也。

潔が父母に伴はれ或は彼地に、或は此地に、田舎の各地をめぐりしは、彼に少からぬ僥倖なりき。様々の山の景色、色々の水の流、人情の異なる、風俗の變れる、潔は自ら大なる教を受けたり。

潔が少年の時最好めるは畫なりき、書籍よりも畫を好みぬ。見る事よりも書く事を望みぬ。若し心に適ひたる小藪の繁み、花草の束など見る時は、筆とらずして止む能はざりき。此趣味によりて潔は甚だ自然の美に近づきしなり。

潔、始めは政治上に志ありしも、終に文學を以て世に立たんと思ひ定めぬ。少年の頃は極めて文學の業をすかさりき。文學はなまけもの、道樂仕事と思ひしなり。一度

人情の幽音其猛烈なる心の火の琴にひびきそめしより、終に又政治上の功名を顧みざるに至りぬ。

彼が好みて讀みしはカーライルとウォーヅォースとエメルソンと、聖經となりき。ミルトン、ユーゴーは、彼しばしば讀みぬ。

潔一度己を天地永遠無窮の大自然の中に見出して以來又以前の潔ならざりき。浮きもしたる彼の心、全く沈みぬ。只だ讀み、只だ觀只だ感じ、しか思ひ、光より暗に、暗より光に其思を駆りぬ。あめ、地、月、花、大空の星の影、地上の人と命、人の歴史すべて彼の心の上に異なる色、變れる形、新なる意味を運ぶに至りぬ。

潔、一種の趣味を持つなり。此は潔のみに限らぬ事ならん。

未だ住みし事なく、未だ見し事なき村落、未だ過ぎし事なき宿驛未だ住み慣れぬ市街、それ等は潔にとりて一種の趣味を覚えしむ。潔若し山の谷の底にふと二、三十の家村を見出すならば、思はず涙浮べて感じぬ、何を感ずるぞ、そはよく潔さへ知らざる也若し日傾きて足疲れし時、一つの宿驛近く來りぬる時、五月ならば五月鯉屋根の上に見えそめし時、小兒の群、何處も同じ小兒の群、街のはしに見えそめし時、不思

議にも彼は他の世界より人間の世に降りしが如き感を燃し、胸とゞろかせ、心にあやしき喜を覺えて、珍しけにあたりを見廻すなり。而して其時、彼は最もよく人情を觀、自然を觀、人生を觀るが如し。此時見たる者は決して忘る、能はず、常に彼の心の底に岩清水の如くひそみ居て、時ありて涙と共に、靜かに流れ出づ。故に潔は甚だ新なる村、街住ひを好みぬ、而も、一度住みし處は常に彼れが故郷となりぬ。何となれば、彼は此一種の趣味をもちて住みければなり。

佐伯は潔が眞の故郷なり。父母の故郷なり。さなきだに彼には大なるチャームなりし也。加へて此趣味あり。佐伯に歸るべしと心定めて彼の心は己に佐伯に馳せ、悲みとなり、喜びとなり、夢となり、まぼろしとなり、只だあけくれ佐伯のみ思ひぬ。

潔は佐伯に來りて、藤村夫婦を見出しぬ。木立村の岸に園田老翁を見出しぬ。臼坪村は彼のチャームなりき。多くの人間の出來事に感じぬ。歴史を讀み、傳記を讀み、詩を讀み、小説を讀み、此地上に於ける人間の運命に感じたる彼は凡て此等の出來事を甚だ敷強く感じ、人心、人性、人生等の深き想像を其上に燃しぬ。見る毎に、出遇ふ毎に、係はる度に痛く自ら感じ、思ひ、苦しみ又惑ひ、又悟り而して又毎に惑ひぬ。

佐伯の自然は潔甚だこれを愛しぬ。されどそは其佐伯なるが故に非ず。只だ自然の美は佐伯に於て最も強く深く彼を動かしぬ。城山、元越峠、灘山、尺間山、彦岳凡て其美を彼に供へぬ。

潔が家を出で、左に折れ、養艱寺の門前を過ぎて、直に野分に進む一路、右に溝あり、左は水田なり、此一路、達して窮る處は家數も十四五に満たぬ蟹田と申す字。まだ其家々に及ばぬ處、一座の森左に在りて、裡に社あり、前に石の鳥井あり、石燈籠あり、大なる石橋溝にかゝり、溝は此邊に至りては甚だ廣く水を湛へ、潮満つる時は小さき湖を形づくる。さて此一路は潔が好みてなす散歩の筋なり。秋ならば紅葉溝の兩岸に並び枝と枝相接して溝を掩ひ、紅、水に映り、水、蒼空と映じ、甚だ美觀を備ふ。人の家に遠く、何かの默想を茲、あちら、こちらと行き、して試むるに甚だ適へる處なり。

此路を左に別れて二條あり、一は静けき谷に導き、一は小さき一箇の村に導く。村を白坪と呼ぶ。此路より眺むる時は別に佐伯より一世界を別つて作るが如し、山の麓にあり、村の背は直に小さき谷なり。右も山、左も山、前は水田、則ち此路の左の田

なり。此路を行けば村人の聲かすかに聞ゆ、子供の呼ぶ聲明かに聞ゆ。潔に取りて此は種々の想像冥想の種なりし也。

生活、人間の地上に於ける經過、其心、其なさけ、其なみだ、これらは潔が想像の目的なり。

潔が佐伯に留まりしは三年なりき。彼が最後の打撃は戀の失望なり。彼は半ば人生の問題に苦める際此打撃に遇ひ、たまり兼ね飄然として佐伯を去りぬ。彼は今猶ほ、村々、谷々、人情のある處、生活のある處、子供の聲の聞ゆる處、男女の衣の縫はる、處、森に斧の音響く處、市に荷馬のつながる、邊、累々たる墓地横はる處、泣き聲の聞かる、處、凡ての同胞の住む場所々々を彼は遍歴しつゝありとぞ。

一人の孤兒ありき。ふとしたる事にて潔と相知り、時々潔の家に遊び來る、潔よく之と語りて常にあはれがり待遇しぬ。此子が親の身上を聞きて潔いたく感じたり。

一人の乞食ありて未だ年若し、潔しばしば之に物を與へぬ。此乞食は馬鹿なりしかば、少しも自ら己の位置を進めんとだに思はず。潔甚だ哀れの事に思ひ、幾度か教へ遂にや、志ある若者となし自分の家の庭掃きとなしぬ。彼は忠實なる僕となりぬ。潔

は之によりて甚だ此世の人々が其不運なる同胞を處置するの酷なるを感じたり。

潔は何處の渡守とも親しくなりぬ。女島の渡守、其他あそここの渡守が家族は皆潔を知りぬ。其初には潔があまりしばし、逍遙して其度毎に物言ひかはし終に親しくなりぬ。潔は始めより親しくならんと思ひしなり。常に此生活の人々に同情ありしなり。

佐伯の町に面白き翁あり、いつしか潔の眼にとまりぬ。此翁甚だ貧しけれども、其おどけと勉強とにて、人に愛せられ生活をすごしぬ。此翁甚だ面白き傳記を有す。

潔は同情深き男なりき。彼が同情の心の眼には、人間の意味甚だ幽玄に映りぬ。彼は人々個々を重んじ得たり。これ同情の心あればなりし。此同情の眼には、如何なる人にも、如何なる破屋にも如何なる村にも市にも、悉く高尚にして意味深き、教ある、情ある物語を見出しぬ。

潔の隣家に一家族住めり、一人の母と三人の小兒と甚だ貧しく送りけり。長女は十七歳、次女は十五歳、末は十二歳の男子なりき。母の人はあたかも五十の坂を越えたり。寡婦と孤兒等は八年前其夫たり父たる人を失ひぬ。今は養艱寺なる墓石已にや、黒く染りけれども、たよりなき此遺族は日に貧より貧に陥るのみにて母は精神的に半

ば死にたるばかりなり。長女と次女とは人並なりしも、如何なる不運ぞ、末の小兒は全く愚鈍なりき。潔此家族と相知り、愚鈍の少年は潔に教へられ、導かれ、甚だ進歩したり、而し十三歳の春、忽然として逝きぬ。母は喪心して亦其跡を追ひぬ。今は此家族只だ二人の女を餘すのみ。

潔が見たる所何事ぞ。彼は只だ人を觀たるか、否天を觀たり、只だ天を仰ぎたるか、否、人を觀たり。

不幸の家族、其情誼、不運の小兒、其無心、或は無學の直剛の男或は無智の迷信なれども而も愛情に充つる母、白坪の老婦、陋巷の癡人、其幽思、其運命、潔は詳細に或は大體に之を觀之とか、はれり。而し多く感じ多く自ら苦しみ、自ら喜憂しぬ。

隣家の寡婦、潔に向つて幾度か其不運と悲痛とを訴へたり。潔之に向つて常に言ひなくさめぬ。

潔は愛の故に愛を視ざりき。善と言ひならされしが故にのみ善と思はざりき。惡とのみ惡まれ慣れし故にあながちに惡と思はざりし也。彼の心はあまりに考究的なりき。淡泊に感動せずして、表裏さまざまに考察して自ら苦悶しぬ。「様々の生活は過ぎぬ。

様々の生活は來らん。」單純なる言語なれども、幾度か潔は自ら唱へて、自ら遊び自ら感じぬ。

潔しばし言ひぬ、吾未だ世を楽しむに至る能はず、又世を捨つるに至る能はず。只だ調子卑き感情の境にさまよふのみと。

潔が家は城山の麓にあり。家の後は崖をなし、崖の上に藪しける。

潮は日々の日記を作りぬ。出来る丈け詳細に書きつらぬ。其日記は潔のありのままの觀察なり、感情なり思想なり。ざんげもあり、虚榮もあり、空想もあり、潔の誇りもあり。恥辱もあり。彼は只だ其日其日と書きつらねたり。

隣家の寡婦に一男兒あり、斯くして彼を東京に送りぬ。蓋し、彼等一家の者は此男兒が必ず立派なる官吏が教師となり、一家富有の生活に救ふべしと信じ居たりし也。

男兒は病死せり。母は驚死せり、姉と弟とは全く貧賤に陥りぬ。

これは潔と呼ぶ人の日記なり、潔の此世を去りたるは二十七歳の春なりき。跡に一冊の日記残されぬ。則ち之なり。

此日記は潔が佐伯より歸る旅中より始まり佐伯を去る前夜を以て終る。佐伯を去り

て間もなく旅に病みて、或る片田舎の怪しげなる旅宿の窓の下暗き雨を聞き乍ら逝きぬ。跡に一冊の筆記のこれり。則ち此日記なり。

すでに日記なり何とて世の所謂著述と比ぶべけん。筆の運びも放逸なり。記す事も入り亂る。文字も選ばず甚だ粗末の文章なり。然るに自ら眞まことの文をなす所以は、ありのまゝの日記なればなり。

さすがに日記なり、支離滅裂のうち、自ら關係あり、聯絡あり、照應あり、日より日、月より月に一個の潔の生ける生命は一貫して現はる。誌されし此事彼事、何の關係なきに似て、潔の眼と心とを通じて自ら聯絡のありて存す。

潔は觀察者なり。物の一端をみて措く能はず。

或日の記

余は此日吾家を出で、はせの道より例の谷を越えつゝ、道すがら古來の文學者詩人達の事を思ひつゞけぬ。彼等は何を寫したるか何を教へたるか、元來彼等は何者ぞや、彼等も彼等に寫されし人間、及び彼等に教へらるゝ人間との關係は何ぞやなど色々思を續けぬ。彼等がしばし苦みて或は世を咀ひ、しかも咀ひし彼等は悉く在らずして、

咀はれし世は依然として地の上に轉り行くを思ひ吾も亦はからず此世になけ出されし事かななどひたすらに思ひ續けぬ。頭を挙げし時風一陣杉の暗きあたりを過ぎぬ。寂寥として身の周圍に山谷の氣充ちぬ。吾獨り語て謂ふ、ア、彼等今は何處にあると、而して又思ひぬ、此坂を越してさびしき足音をき、し者幾たりぞ。哀れの少女よ、さなり薪木背負ふ哀れの少女もありつらん。

或日の記

吾己に屢々感ずることあり、村落に入りて、或は土橋を渡り、或は柿の樹の下に立ち、其處の農女を見、彼處の老樵を見る毎に感ずる事のあるなり。

自ら思へらく、吾と彼等との間、確かに何物か挟まれ居るを知る、言ふに言はれぬ隔離を感ず、此隔離は果して何物ならんと考ふれども益なし。たゞ一種の感ありて隔離ある如く思はしむ。吾は如何にもして此隔離を排し去り、農家山屋の人々に接近せまく願ひぬ。肉體は近づきたり、言語は交されたり、されど猶大なる谷は吾等の間に挟まる、也。彼等は吾が住める世界の者に非ず、吾は彼等が呼吸する空氣になる、能はず。言ひ換ふれば、吾自ら吾のまゝにして同時に村の若衆と全く等しき趣味、等しき感

情、等しき思想を續くるを得ることこそ吾が願ひなり。

更に言ひ換ふれば、吾が眼にも彼の鎮守の森の映ることあだかも村の若衆の眼に映る如きを希ふなり。

されど到底出來難き事なり。則ち知る古より同情こまかなる詩人達が農夫野人を見て歌ひし詩も到底是れ詩人の感情にして、たま〜農夫野人は其感情の寄托物となりしのみ、農夫野人の眞の生活は決して農夫野人ならぬ詩人に知らる可くもあらじ。

老人、老媪、少女、妻、貧人、富人、青年、壯年男子、農夫、商人、工匠、樵夫、船頭、孤兒、乞食。

正直者、馬鹿、奸忙、病人、戀愛の兒、善人。

潔が日記は決してあり得べからざる事實を記さず、普通あり得べき事も潔の眼と心に上りて自己の詩趣をなすのみ。

或日の記

夜は次第に更けぬ。ふたりの情は次第にこまかに親しみぬ。話は自から哀れになりぬ。聲もをりく曇れり。其時は見かへしては涙のみにき。

『潔さま』老女は言ひぬ。『とても早やわたくしの運はつきました』皺がれし手の甲にて眼こすりぬ。

此時窓の外さらくときめく如く雨ふりそめけり。

雨降りたる夜の冬の朝、風なくなまぬ、沈靜の朝、白雲元越山の谷をうづむ。

白坪村の朝煙しめりて高く上り得ず、後の谷にこんもりとたなびき、黒く濕ふ藁屋より青き煙ゆるやかに上りて村の上を掩ふ。綿うつ弦の音例の如く聞ゆれども今朝は濕りてきこえ、彼處に一人、二人、彼處の堤の上を二人、三人、村人の行きかふを見る。

老松の馬場の松が枝より墜つる雪は昨夜の雨のなごりなり。田のも、櫛の枝、をちこちの鳥勢なけに鳴く、さすがに冬の朝なり。

砂糖つくる場所に近づけば、若者の小屋のうちに唱ふ聲聞ゆ。少女等の笑ふ聲聞ゆ。

牛の鼻息聞ゆ。蟹田の鍛工の前を過ぐれば鐵槌の音已に朝の雲にひびく。

舊の十一月十五日は佐伯の祭なり、五所大明神の御祭なり、此祭は佐伯にとりては甚だ注意すべき價値を有する材料なり。

此祭が關係する所意味する所は決して小少にあらず、試に思へ如何に多くの家族が此祭の媒によりて平生の疎遠を癒し得るぞ、如何に多くの小兒たちが此祭の御蔭によりて其心を新らしき樂の轉じ以て言ふに言はれぬ平和の一生涯の最初の呼吸を呼吸し得るぞ、數百年の古き社の森は相も變らず太鼓の響を重々しく反響せしむるぞ。

人間が其社會的幸福を享有するに就て古も今も何處に至るも御祭なる者の樂にする事如何に多きぞや、是を以ての故に余は其祭を重するなり、其太鼓を聞けば色々の想像を馳せ行くなり。

冬の夜の静けき月の光は今しも風なき下界に満つるなり。子供たちの笑ふ聲が聞ゆるなり。彼等は明神の方に當りて響く太鼓に胸躍らせつ、馳せ行くなり、されど隣の彼の子供は行き能はぬなり、なさけなき事かな。

空は曇りけり、風は寒みぬ、冬の空の模様也。されど小兒の胸は春の日の晴れ渡る

彌生の異らす。

是時に余は彼の病床を見舞ひぬ、彼は泣きなき語りて言ふ。

徳藏の墜落

一郎と其妻との自殺

大島尚三の運命、墜落

少女等老ゆる勿れ、吾も老いじ

三好 馬の小兒に對する希望

倉の 落但し其一家の不幸

入野虎之進の命運

横道家の零落と最後の不運

狂人あり。其父之を憂ひ、之を悲みて措く能はず、彼は如何なる道行きを經過して

狂氣せしか。

彼は朝毎に菜園を散歩する彼の家の家妻を見たり、其背に小兒を載せ其顔に朝日の光を受け、其口に小唄を唱ふ。

彼は佐伯の歴史に熱中しぬ。彼は佐伯の近傍を歩みめぐれり。彼は戀に其心を専にせし事幾ヶ月、彼は

彼はふと此人の日々の生活に着目し始めたり、其甚だ萬變一律なるに驚きぬ。今日も、明日も彼はその注意を此人の外形の生活の上に續けぬ。

城山の舊跡は潔に取り、少からぬ印象を與へ、想像を與へ感動を與へ、冥想を與へ、歴史を與へ、古と今と未來とに一貫する想像を與へ、東西興亡の歴史に於ける同情を與へぬ。

秋は城山の紅葉、谷間に、木間の燃え立ちたる炎の如く、朝日夕日に其美を専にす。

冬は喬木の蔭、暗く、樹梢の風すごし。蔦葛、石垣にからみたる、灌木縦横に荆棘舊跡に満ち、苔、石に白く草は武士の夢の跡をなす。

眺むれば佐伯市街は目下に在り。川流蛇の如く、海洋遠く四國地を浮べ白帆處々に古も今も詩人の幽懷を刺撃す。

忽ち晴れ忽ち雪降る、佐伯近日の天氣也。白雲の大なる哉。蒼空の雲間に見ゆる更に美なる哉。

潔に愛友一人出来たり。此人潔より年若き事五歳、美しき少年なり。心あくまで勇勇しく、情甚だすなほに、學も亦年にくらべて淺しといふ可からず。見識常の少年の上に出づること數十等、されば潔と相見て相知りし以來、互に無二の友となりぬ。潔之を愛する事弟の如く、彼また親しむ事兄の如し。

少年思ひ立ちて都門留學を志して佐伯を出發するに至れり。潔もとより相談にあづかりたるなり。潔少年と別る、前數日は少年の事のみ想ひやりぬ。愈々、港に送りて彼少年の姉妹達と歸りがけ、いたく天地命運の茫然として眞まことによる所なきを覺え、人

間が其間に生滅して、苦勞經營し、或は會心の友とも別れ、或は慈愛の母とも別れ、以て浮舟に生命を托す。嗚呼これ畢竟何の意ぞ。誰か暴風の彼を海中に葬らざるを知らんや。誰か惡鬼の彼に急病を下すを知らんや。凡てはあやしき命運の手中に存す。しからば人間の此天地の間にかゝる、眞に頼る可きなしと云ふべし。否々神ぞまします。潔は熱涙をのみていのりぬ。勞苦經營豈空ならんや。哀別離苦豈悲しむに足らんや。東を望みて叫び、ア、好少年來るべき聖き運命を喜べ。進みてはけめく。

潔が少年を送りたる詞に曰く

爾、爾の立てる周邊を見よ。爾の生れたる時代を見よ。吾國民の位置を思へ。世界の歴史の指向を思へ。希望あるは吾國民なり、人類の前途愈これより榮えん。爲すべき多く盡すべき多し。仰いで皇天を忘る、勿れ。

旗本の老翁、甚だ奇人、奇なる者の尤も奇なるは、歴史に詳細なることなり。彼の歴史は軍記軍談の仕入なれど、人若し彼の辯舌形容を透して過去の歴史を顧る時は、日本の人民の過ぎ去りし生活の模様など活きくと想像し得るなり。然るに彼れは正直温和に似て一種の剛直性を有す。

守錢奴強慾ば、彼と甚だ合はず、彼は常に貧窮になき零落になく。

彼潔に問うて曰く、如何なれば悪人は榮え、善人は苦しむか、人間の世界只だ此れに過ぎざるかと。潔此問に苦む。

潔佐伯にある數月、忽ち嘆じて曰く、嗚呼余も亦己に此周圍に化せられ了りぬ。嘗て感じたるチャーム今は感ずる能はず。吾も亦此等の人々と共に擾々の生活に入りぬ。

潔未だ友を得ず。老祖母に別る、介然として孤兒となる。戀人と別る、天地の孤客となる。始めて靈魂の不朽と愛の永久を信ぜざるを得ざるに至りぬ、叫びて曰くア、子を失へる親よ。親を失へる子よ。妻を失へる夫よ。夫を失へる寡婦よ。爾等何に向つて滿腔の悲哀を訴へんとはするぞ。死の暗室に向つてか、はてしなき大空に向つてか。天地茫茫として答へず。爾等も亦漸く亡びんとす。爾等亡びて相率るて何處に之かんとするか、生きては無告絶望の魂となり、死しては蛆と塵と空との餌食となるか。嗚呼死せる者豈死なんや。過ぎし者豈過ぎんや。

潔、書して曰く、ア、恐しき哉。見慣れたる蒼穹漸く吾に驚愕の情をみなぎらし來るを覺ゆ。深夜の星斗。

潔、曰く其理想にあくがれ、妄想に迷ひ、或は英雄といひ、或は事業と稱し、歴史と稱し、哲學と稱し、學者と稱し、進歩文明と稱する如き感念のみに形づくられたる世界に住む所の心を轉じて、無智と呼ばれたる、無學と呼ばれたる、生活の爲に生活すと嘲けられたる、故に思ひも付かれざりし農家の民の心持に自らなりて自ら反省し來り更に人間生活なるもの、愈々變妙不思議なるに驚きぬ。

辨當取りの小使の老翁、大聲に曰く、『年をとると釘がゆるんでますからなア。』

武二は少年と共に茅屋をかりて住みぬ。少年は貧家の生にして木立村の産なり。武二のもとにある六ヶ月にして死す。此少年は武二の無二の友なりし也。姉をいかにせよといふ。

天地の秘密

何故にマルチンルーテルは其友アレキシスの雷死に打たれたる乎。何故に西行法師は其友の頓死に悟りて身を捨てたるか。夫れ人は皆死を覺ゆるに似て實は然らず、滔滔たる衆生悉く死を忘る、彼のマルチンの如き、西行の如き、實に其友の目前の頓死によりて始めて死なる者の不可思議にして生なるもの、亦た不可思議なるを悟りし也。一方は無類の厭世家となり、一方は宗教大革命家となる。

何故に雷はルーテルに墜ちずしてアレキシスに落ちしか、ルーテルの足下にアレキシスは倒る、アレキシス若し生きて、ルーテル彼の足下に死せしならば、宗教革命は起らざりしか、兎も角も人間と天地宇宙とは不可思議なる命運、人間の如何にともなすべからざる命運の支配あり、歴史も傳記も此中より來るを免れぬ事と言ふ可し。人、天地の秘密に感じ神會、默契する者世間少しとせんや、只之を明顯するの術に精通せざるの多き耳。其術に精通して而も彼の微妙立通爲者、之を詩人と言ふ、之を

豫言者といふ。

青年少壯の時代

少壯の時代は最も比較す、夫れ只妄想の比較をなす。

少年時代の「妄想」一概に妄想と云ふ勿れ。何故に少年は妄想にふけるや、否抑妄想とは何ぞや、老成人には何故に妄想なきや、否果して妄想なきや。

人間生まれて地に墜つ、玉の如く、星の如し、次第に成長するにつれて汚點罪雲むらがりて附着す。之れ事實なり然り事實なり、然れども、何故に此の如きかを究めよ、かゝる責は何に歸す可き。

「大業」とは如何なる時より發したる思想感情の言語なるか、人間が如何なる程度に迄發達し來りたる頃此觀念は生れしか。而して最も普通に此の觀念は如何なる性質を帯ぶるものなるか、ウルテヤが所謂人類の歴史は血の記録なる其歴史を有せり、吾等人間は如何なる意味感念を此の文字に有するか、大業——大業——大業——大業！ 此れ實に少年時代の警句なりし。

忠ならんと欲すれば則ち孝ならず、孝ならんと欲すれば則ち忠ならず、之れ日本外史を始めて讀み習ひし時少年の單純なる感念を極めて強く動かしたるものなりき。余は平重盛の事蹟を讀みては幾度か單純潔清の心情を動したり、余外史を音讀して實に幾度か泣きたり。

人が其の成長して後に後悔し煩悶する様を研究せんよりも、如何にして少年時代幼年時代に後悔煩悶の種を心中に播かれしかを研究せよ。

一群の男女が心を合せて神を讚美して歌ふを聞けり、吾心をどりぬ。

少年時代を吾はかく養はれたり、吾はかく染められたり、吾はかく形造られたり、吾はかく侵されたり。然れどもア、然れども吾には笛を聞いて泣くの身を持ちラツバを聞いて躍り立つの耳を持ち、花を見月を仰いで恍然自失するの目を有したり。吾には猶ほ天來の心靈全く死せざりしなり。

人間は場合より場合に移り行く盲蛇なり。人間の版圖は時を以て場所を以て制限せらるゝの外知りもつかざる制限を四方八方より受くる者なり。其の制限を看破して之れが桎梏を脱するもの、則ち場合より場合の流轉を免かれて能く己れの足場に永立す

るを得べし。

青年少壯の夢想の題目たる前途の樂。ア、前途の樂みとは如何なる樂みぞ、抑も亦た前途とは何ぞ！吾には前途なし、只だ今日あるのみ、只だ生命あるのみ、只だ心靈あるのみ、只だ心靈の幽音悲調あるのみ、只だ勞働力作あるのみ。

信仰と肉情

人類果して萬世永久を通じて一の目的に向つて走るとせん乎、其の目的は何の目的ぞ、曰く問ふを止めよ、只だ此のまゝに安んぜよと、吾人は屢々此の言を聞く。然れど、之れ終に失望の言たるに過ぎず、然らざれば今日までの「意義」「信仰」「倫理」をば冥冥の中に默認せる也、猶ほ然らざれば彼は酒を以て苦痛を忘るゝと等しく、只日々の習慣に盲目的に服従して終に思を該に及ぼすなく、頭を振り目を閉ぢて何をも視ず何をも云はざる也、其の確然たる信仰の遂に視るべからざるは皆一也。

宇宙は無邊際なり、其の時間無窮、其の空間無限、人間生を此の中に保つ、空間と云ひ時間と云ふも、其の觀念たるに過ぎず。

花あり、光あり、波あり、蝶あり、告天子あり、蒼々の天あり、悠々の地あり、寂寥々あり、音樂あり、人間之れ通じて言ふ可からざる觀念に入る、此れぞ宇宙の眞靈を冥合せるなり、死は只だ肉の亡びなり。生能く此の美、幽、眞なる觀念に入るを得

ば、肉を離るゝも亦た實に此觀念に冥合幽一するなり。

則ち信仰の人は此の死後の觀念に入る、生前此の觀念に入りし度と肉情に入りし度に從つて死後此の聖會に入るを得る度も自ら異なる也。是に於てか、信仰の人と肉情の人との區別あり、進歩の意義も生くる也。

最高の技術は此の觀念に最も多く人を導くなり。

詩、然り、音樂然り、畫然り。

一個人の目的は之れに進むなり。

時代の目的は能く一個人を茲に入るを得しむる也。

則ち肉情の人は死後亦た暗黒に行く也。

吾れ、エマルソンの *Man is his own star* を唱し而してウォールズウオースのインデペンデンスを讀み、而して夕暮に獨り寂寞の境を漫歩して、天の蒼々として限りなきを仰ぎ、時の悠々として窮りなきを想ふ時は、人間心靈の獨立を感じ、齷齪として他の見聞を求むるの念を脱し、日月の永久を走る如く、吾が心靈も亦悠々獨歩して千萬窮りなき天地に住むを感じる也。ア、獨立なる哉、自由なる哉、悠々たる天地なる哉。

唯皮相のみ

余朋友と語るに、余が沈思冥想し、讀書し、感激して得たる思想を語れば、友は常に、然りく、實に然りと答ふ、其の様、誠に能く余の意味消息を解し居る者の如し。然れども實は彼等多くは余が眞意を解したるに非らずして、ありふれたる言葉に現はれしありふれたる思想を以て余の幾多の經驗、幾多の沈思、幾多の煩悶によりて得たる思想と同一視せるなり。余は是に於て悟り得たり。余が彼の大詩人、大豫言者達の文字を讀んで解し得たりとなす事も、彼れ大詩人、大豫言者達より視れば、實に皮相を撫せるものに過ぎずして神會靈悟に至りては容易に到り難き者なる事を知り得たり。

信 仰

信ずる事、信ぜざる事てふ區別よりも人間は大なり。されど不思議にも大なる人間程愈々堅き信仰を有す。

書籍の知識より冷かに組み立つる信仰は要するにやむを得ざる信仰なり。信仰の光、心に燃ゆる、すべからく、春雨の融くるが如く已に自ら知らず、欺いて自ら知らず、故に致々一日も安んぜざるなり。かめて眞境に到らんとす、此の熱心は必ず酬いらるるなり。故に眞人能く神韻縹渺の自然の境に到著してあらゆるミステリーを^{エンブレックス}抱懐して、惑はず。ゲーテが所謂 Mysterious all, yet all is Good の大信仰之れなり。余自らかくは推論直覺し能ふと雖も、只だ之れ思想に過ぎざるのみ。心耳を傾けて雄大高壯の天籟を聴く、未だまことに此境に到る能はざるを恥づ。

18838



◀集品小及詩▶

大正九年七月十五日印刷
大正九年七月二十日發行

(定價金八拾錢)

著 作 者

國 木 田 獨 步

發 行 者

佐 藤 義 亮

發 行 所

新 潮 社

東京市牛込區矢來町三番地

電話番町(八〇九番)

番二四七一(京東)替振

印 刷 所

東京市小石川區西小石川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊 一

■春月小曲集

生田春月氏著

小形天金 定價七拾五錢
極美本 郵送料六錢

多恨多感の詩人春月氏の小曲百八十餘篇を收む。戀を歌ひ、少女を歌ひ、若き日の夢を歌ひ、破れし胸のかなしみを歌ふ。哀切にして可憐、悲痛にして哀婉。日本傳來の原朴なる歌謡の精神と、近代人の鋭敏なる神經とは作者が天賦の詩人的素質の中に融合して此の世にもいみじき抒情詩をなす。ひびきは玉の鳴るに似て、すがたは花の散るに似たり。詩壇近來の一大收穫として注目す可く、わけても、あこがれ心地すゞるなる若き人々の、愛誦おく能はざるものなる可し。

■詩集 感傷の春

生田春月氏著

二百七十頁 價七拾五錢
中版特製 郵送料六錢

■詩集 靈魂の秋

生田春月氏著

二百七十頁 價七拾五錢
中版特製 郵送料六錢

「感傷の春」は傷み易き青春のおもひを盡くして、熱き戀、果敢なきあこがれを歌ひ、「靈魂の秋」は心の秋を歌ひて、青ざめし魂のあへぎを彈ず。共に長曲短曲二百有餘篇を集めしもの。兩々相待つて、青年詩人生田春月の全詩集をなすもの也。

歌集 靜まれる樹

金子薰園氏著

中版 定價八拾錢
美本 郵送料六錢

金子薰園氏の最近の歌集成る。澄み渡れる大空の下、風風ぎて靜まれる一樹の、さびしく氣高き姿は、まさに氏が歌の姿なる可し。清純の感覺と、優雅の詩情と、而してその圓熟の極致に達せる技巧と、まことに現下歌壇の最高水準を示すものたり。

■歌集 旅情

佐渡、越後、長崎、京都、奈良、紀州、その他飄零のおもひを行く雲に托して、作者が足跡の及ぶ所、そこに新しき歌枕を作れり。

(装路一浩) 定價八拾錢
送料六錢

■祇園歌集

若く涙多き詩人が京都及び大阪等に詠みしもの總べて三百首。燃ゆるが如き情熱を注いで戀の都を讚す、眞に作者の獨擅境也。

(装二夢) 價錢五拾六錢
送料六錢

■東京紅燈集

紅燈華かなる東都の花柳街を歌ひ、名ある歌妓を歌ふ。新作三百首。歌はれたる東京情話にしてまた、歌はれたる東京美人譜也。

(装二夢) 價錢五拾六錢
送料六錢

吉井勇氏著

ツゲネーフル全集

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
春の波	處女地	父と子	煙	その前夜	初戀	ルーヂン	獵人日記	
生田春月氏譯	田中純氏譯	布施延雄氏譯	谷崎精二氏譯	大貫晶川氏譯	生田春月氏譯	田中純氏譯	生田長江氏譯	
▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 十二圓	▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 壹圓卅錢	▼▼ 送料 十二圓	

泰西名詩選集

小形特製極美本
紙數一册四百頁
一册定價壹圓宛
郵送料六錢づつ

第一編	第二編	第三編	第四編	第五編	第六編
ハイネ詩集	ホイットマン詩集	ゲーテ詩集	エルレエヌ詩集	トラウベル詩集	カアペンタア詩集
生田春月氏譯	白鳥省吾氏譯	生田春月氏譯	川路柳虹氏譯	福田正夫氏譯	富田碎花氏譯

續刊 ■ バイロン詩集(佐藤春夫氏譯) フレーク詩集(山宮允氏譯)

■ エルテル叢書

泰西の高名 總洋布天金極美本
なる戀愛文 定價一冊金八十錢
學の傑作集 送料一冊六錢づゝ

ギヨオテ作 秦 豊吉氏譯 (廿一版)

(1) 若きエルテルの悲み

若きエルテルが、美しき、されど既に人妻なるロツテを戀ひて、悲みに胸破れ、自ら殺して果つるまでの、なやみとわづらひとを書簡體に直叙せる、世界最高名の作。

サンピエル作 生田春月氏譯 (十二版)

(2) 海の嘆き (原ポオルと名ギルジニイ)

南の海の小さき島なる椰子の葉蔭に幼なき戀をはぐんだ少年と少女とが、浮世の運命に弄ばれて生別に哭し、死別に哭するに至る、あはれ限りなき戀物語である。

ベチ エ作 後藤末雄氏譯 (第七版)

(3) 戀と死 (原トリスタンとイゾルデ)

王女イゾルデは悲しき戀に悶えつゝ、海を越えて嫁ぎゆかうとする、それを送る勇士トリスタンは、媚藥の惑はしに心を奪はれ、遂に死にまでの戀に殉ずるに至つた。

ツルゲエネフ作 衛藤利夫氏譯 (八版)

(4) 薄倅の少女 (附馬車待の間録)

切なる戀にやぶれ、若うして死せる薄倅の處女を描くに、其獨特とするの靈筆を以てせるもの。言々咽ぶが如く、句々の間に熱涙あり、眞に哀切限りなき物語である。

シヤトウブリアン作 生田春月氏譯 (六版)

(5) 少女の誓 (アタラとルネ)

アタラは新大陸の原始の自然を背景として、神に堰かるゝ人の戀の烈しきなやみを描き、ルネは姉と弟とのあやしきも、うつつなき戀心を描く、共に世界高名の傑作。

ピヨルンソン作 三上於菟吉氏譯 (六版)

(6) 森の處女 (原ジイノオア、ゾルバッケン)

山の彼方と山の此方とに生ひたつた少年と少女との初戀のあこがれとなやみとを、峰高く霧深き那威山郷の自然を背景として、作者一流の筆に描ける清純の物語。

ギヨオテ作 久保正夫氏譯 (五版)

(7) ヘルマンとドロテア

ライン河畔の一貴公子と革命の難を遁れ來れる美しき佛蘭西娘との戀を描く。華麗にして優雅、熱切にして而も哀婉の思ひほのかなるもの、ゲエテの最傑作である。

メリメ作 布施延雄氏譯 (五版)

(8) カルメン (附エニス録の花嫁)

松井須磨子が最後の舞臺に演ぜしもの。濃艶にして放縱、野生のまゝの情熱に活くる唄ひ女が、火の如き戀に身を盡くすの幾情景を描く。極めて異色ある作品である。

ラベ・プレヴオ作 廣淺和郎氏譯 (新刊)

(9) マノンレスコフ

美しくしき虚榮の女マノンと、女の卑しきを知りつゝ、尙ほ不思議の愛に身を焼く青年デクリエウとの、傷ましく悲しき戀の經緯を描ける、佛蘭西の名高き小説である。

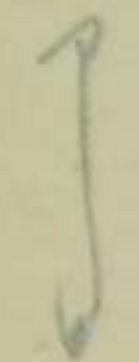
新進作家叢書

■中版百六十頁づゝ
 ■一冊價金五拾錢宛
 ■郵送料一冊四錢宛

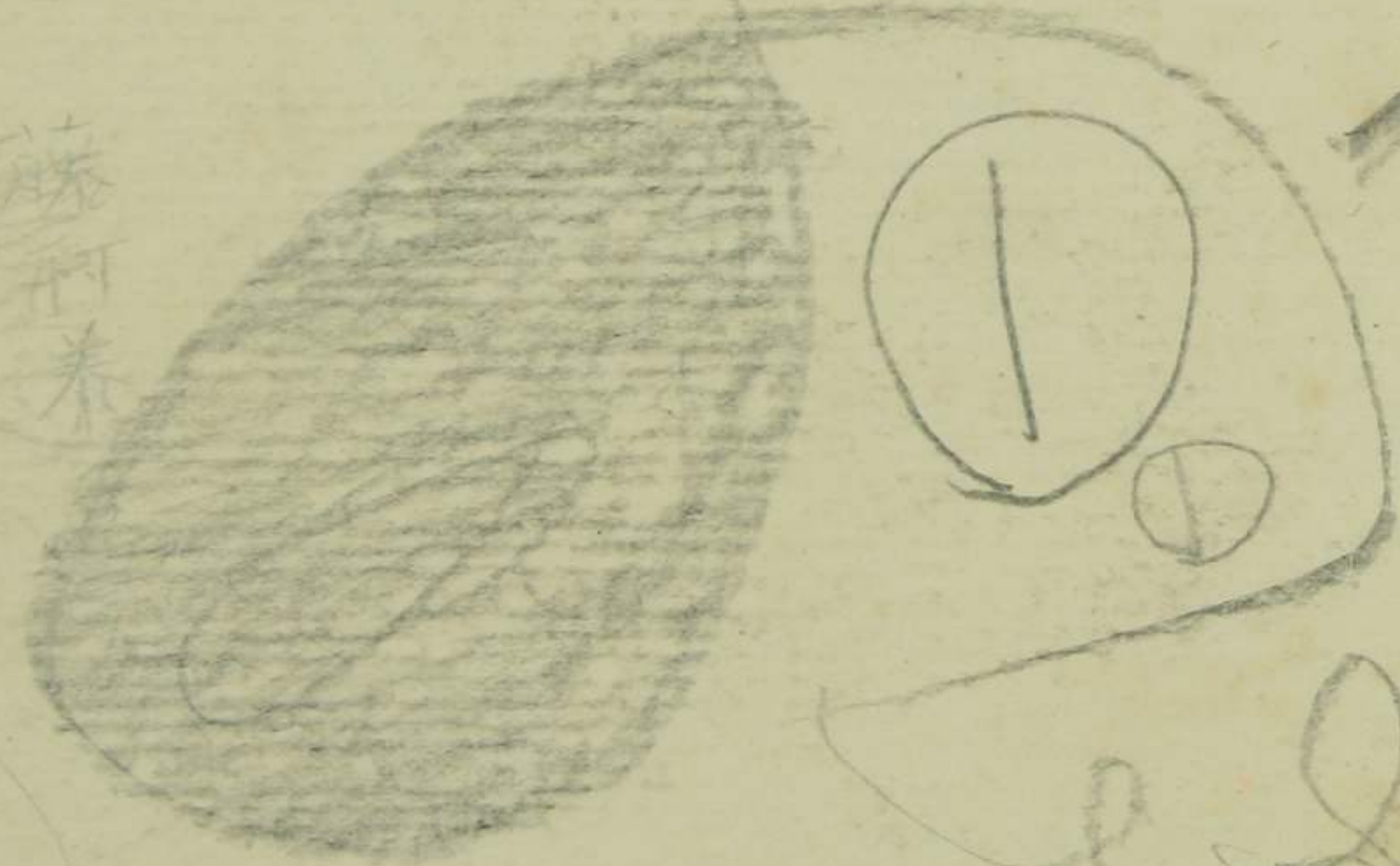
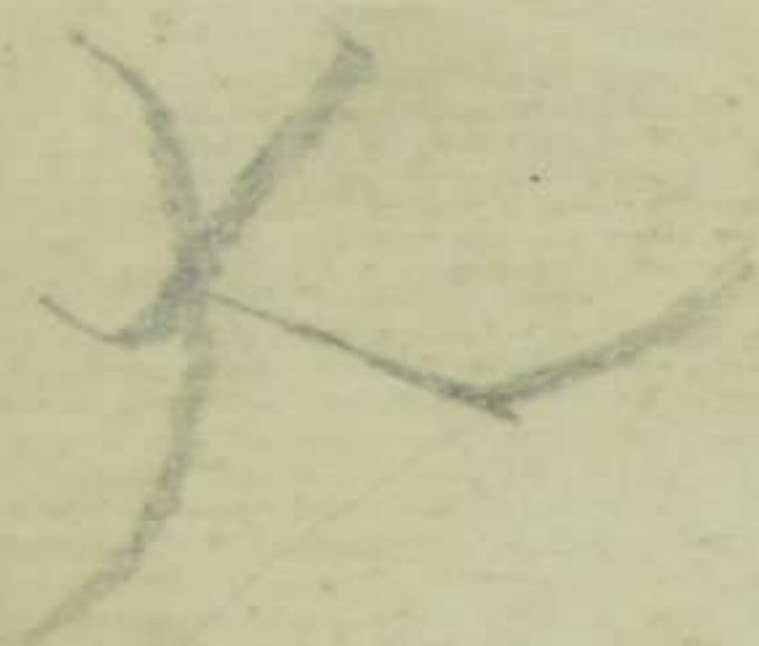
第一 ■ 新らしき家	武者小路實篤	十三 ■ 愛と憎み	江馬 修
第二 ■ 恐ろしき結婚	里見 淳	十四 ■ 土の靈	野村愛正
第三 ■ 生あらば	豊島與志雄	十五 ■ 無名作家の日記	菊地 寛
第四 ■ 大津順吉	志賀直哉	十六 ■ お絹とその兄弟	佐藤春夫
第五 ■ 生と死の愛	谷崎精二	十七 ■ 赤い矢帆	江口 渙
第六 ■ 結婚の前	長與善郎	十八 ■ イボタの蟲	中戸川吉二
第七 ■ 暴君へ	有島生馬	十九 ■ 不能者	葛西善藏
第八 ■ 煙草と悪魔	芥川龍之介	二十 ■ 霰の音	加能作次郎
第九 ■ 夢と六月	相馬泰三	廿一 ■ 歸れる父	水守龜之助
第十 ■ 手品師	久米正雄	廿二 ■ 修道院の秋	南部修太郎
十一 ■ 一つの芽生	中條百合子	廿三 ■ 結婚者の手記	室生犀星
十二 ■ 神経病時代	廣津和郎	廿四 ■ 放浪者富藏	宮地嘉六

25

茂1170



水



藤
竹
茶



77



終